873
特54
126

受験準備叢書

# 最新西洋歷史 前編

普通學研究會著

東京 一書堂發行

261
190

2

書籍備要會

新版

# 歷史

前編

東京 一書堂發行

關治
43. 3. 24
內交

# 緒言

研究叢書の一部として缺ぐべからざる西洋歴史は、東洋歴史と共に世界古今の興亡盛衰を知らんがための双璧たり。而して東洋歴史に在つては年代最も古く、而も我が國に特別關係ありと雖、古來朝鮮及び支那を除きては系統的史實のあるものなし、然れども西洋歴史に在つては世界文明の覇を稱し、先鞭を着けたる点に於て最も文明的史實頗る多く、如何に簡潔ならしむるも、到底之を一册に完結記述すべからず、是に於て前後二篇に分ち、其前編たる本書には專ら混沌時代たる上、中古史を載せたり。記述の體裁は東洋歴史と別箇になし。東洋歴史にありたるが如き比較對照の年代を用ゐず、單に西暦紀元年數のみを記載したり。是れ一概に西洋史とはいへ數多の列國を各別に叙述する場合、一々之が比較對照をなすの煩瑣を避けたるに依る。尚、一小册子の能く浩瀚なる西洋文明の複雜なる變遷を叙するに當り成る可く東洋史に屬する記事を除き、以て西洋史當面の材料を豊富ならしめたり。學修者及び豫修者の留意を要す。

明治四十二年十二月

於普通學研究會編輯部

擔當著者識

# 最新西洋歷史 前編目次

## 第一編 上古史

### 第一章 東方諸國の古史


一、エジプト……一
1エジプトの國情 2興亡略記 3建築技藝 4宗教思想
二、メソポタミア平原の文明…八
1カルデア 2アッシリア 3バビロニア 4メソポタミアの文化
三、シリア平原の文明……一四
1イスラエル 2フェニキア
四、ペルシア……二〇
1イラン高原の文明 2興亡略記 3郡縣政治 4文學及宗教


### 第二章 ギリシアの勃興と東西文明融和


五、ギリシア……二五
六、スパルタ……二七
1スパルタの起原 2スパルタの國家組織
七、アテネ……三〇
1アテネの起原 2アテネの政治
八、ペルシアとギリシアとの大衝突……三七
1衝突の原因 2タリウス王の遠征 3ギリシアの軍備擴張 4クセルク

セスの來侵
九、アテネの盛時……四一
1テミストクレスとアリスチデス 2ペリクレス時代 3ペロポネソス戰爭 4アテネの敗亡
一〇、スパルタとテーベ……四五
1スパルタの全盛 2テーベの反抗
一一、マケドニア……四七
1西洋文明に於けるマケドニアの地位 2フイリポ 3アレクサンドル大王 4アレクサンドル大王の歿後 5マケドニアとギリシア及びエジプトとシリア
一二、ギリシアの文明……五四
1戰捷後のローマ クラツクスの改革 3ソキイの市民權取得 4貴族黨と平民黨との軋轢
一七、ケーザル……八七
1第一回三人政治 2ガリア及ブリタニア征服 3ケーザルとポンペイウスの爭權 4ケーザルハ全盛 5ケーザルの施設 6第二回三人政治 7アクチウムの戰爭
一八、ローマの帝政時代……九四
1オクタヴアヌス 2フラウイウス 3賢帝五人、愚帝二十四人
一九、東西ローマの分離……九八
1ヂオクリチアヌス 2コンスタンチヌス 3ゲルマニア人 4蠻族の消長



1其進歩の原因 2學術 3美術
第三章 ローマの勃興
一三、イタリア半島の文明…五七
1イタリアの住民 2ギリシアとイタリア 3ローマの階級 4ローマの宗教
一四、ローマの建國以前……六四
1最初の政體 2政體の變化 3平民政治 4ローマの征服 5ローマの統治
一五、地中海々上の覇權……七二
1カルタゴ 2ローマとカルタゴとの衝突 3ローマの地中海征服
一六、ローマの衰運……七九
5テオドシウス 6蠻族の侵入 7西ローマの滅亡
二〇、ペルシア……一〇五
1ペルシアとトラヤーヌス帝 2サツサンデー王統
二一、ローマの文明……一〇七
1學術 2社會制度 3キリスト教
第二編 中古史
第一章 列國の創始
一、ゲルマニ民族の遷徙…一二五
1五大族 2ゲルマニの大遷徙
二、ゲルマニ種族の建國と西ローマの滅亡……一二七
1西ゴートの建國 2フン族の盛衰

3 西ローマの滅亡　4 フランク王族
5 ローマ法王
三、東ローマとペルシア……一二九
1 東ローマ　2 ペルシア　3 ユスチニアヌス帝　4 オスロー　5 エツタル
6 ベリサリウス　7 突厥
8 兩國の決戰
四、サラセン……一三三
1 サラセンの故地　2 ムハメツド
3 サラセンの膨張　4 ペルシア滅亡
5 東西分立　6 サラセンの文化
第二章　列國の發達
五、ローマ法王と正教分裂一三六
1 ギリシア帝國　2 レオ三世帝
3 ローマ法王　4 政教の權　5 正教の分裂
六、カロロ大帝の業……一三九
1 フランク國　2 カロロの大版圖
3 カロロの守成　4 フランクの分裂
七、ノルマン……一四一
1 ノルマン　2 フランク侵入　3 イギリス侵入　4 イタリア侵入
5 ロシア侵入
八、神聖ローマ皇帝とローマ法王……一四四
1 フランス王國の確立　2 ドイツ帝國の始　3 ホンガリア國建設
4 神聖ローマ皇帝　5 皇帝ト法王
の爭權
九、サラセンの末路……一四九
1 西サラセンの衰弱　2 東サラセンの末路
一〇、十字軍……一五〇
1 原因　2 遠征　3 結果
一一、西歐の制度と情形……一五五
1 封建制度　2 武門武士　3 騎士
一二、東歐の國情……一五七
1 ロシア　2 ギリシア帝王
一三、蒙古の侵入……一五九
1 モンゴル族の强勢　2 バツの西征
3 チヤガタイ國　4 イルハン國
一四、イギリスとフランス一六〇
1 イギリスの憲法發達　2 フランス王權の確立
一五、百年戰役……一六四
1 開戰の原因　2 其の前半
3 其の後半　4 講和
一六、ドイツ帝權の失墜……一六六
1 ハプスブルグ家の興起　2 黃金文書
3 スウイス國の獨立
一七、ローマ法王權の失墜一六八
1 衰微の原因　2 法王とフランス王
3 バビロニアの幽囚　4 宗教改革の聲
一八、西歐諸國の中央集權一七〇
1 イギリスの中央集權　2 フランスの

中央集權　3イスパニア建國
4ポルトガルの建國
一九、オスマンリ、トルコの勃興……一七三
1オスマンリ、トルコの隆盛
2チムル帝國　3東ローマ帝國の滅亡
第三章　發見と復興
二〇、文運復興……一七五
1暗黑時代　2文藝復興
3美術の復興
二一、諸種の發明と發見…一七七
1活版の發明　2地理上智識の發達
3地理上の發見
二二、兵制の變遷……一七八
1火藥の發明　2戰法變革

六

目次終



最新西洋歷史　前編

普通學研究會著

上古史

東方諸國の古史

# 第一編

## 第一章

### 一、エジプト

#### 1　エジプトの國情

氣候溫暖、土味肥沃なり。毎年四月より雨期に入り、六月の末よりニール河氾濫して十月其の極度に達し、十一月より水は次第に減じ、其の氾濫したる跡には厚く黑き肥沃なる泥土を殘す。此の肥沃なる黑土の爲めに作物よく實り、三月より四月の間に其收穫

エジプトはニール河に沿ふたる平原にして

を終る有樣なり。斯く勞力を費さずして容易に生活し得る故、人民多くニールの兩岸に集りて國家を建設したり。エジプトの政体は君主制政治にして、君主は臣民に對し絶對權を有せり。

人民は僧侶、武士、庶民の三階級に別る。各權力に差異あり。(一)僧侶　僧侶は國王の教育者にして且顧問官たり。又一般人民に對しては裁判官となる。宗教及學術は彼等の專有するところ也故に國王に對し尤も大なる權力を有し、且廣大なる土地を私有す納稅の義務なし。(二)武士　武士は僧侶につぎて權力あり。土地の私有及納稅免除の特權を有す。武士の種類は步兵騎兵車兵の三なり。(三)庶民　庶民は農夫、手藝人、商人、水夫、牧夫、の五種類あり。前二者は土地を私有するを得れども、後の三者は此の權利なし。

**2 興亡畧記**　エジプトの第一代の王は、メナと言ひ、メンフイ



スに住へり。其年代については、異說同じと雖、紀元前三〇〇〇年頃なるべしといふ。

紀元前二四〇〇年頃に至りて、メンフイス王朝衰へて、テーベに起れる新なる王朝榮えたるも、其後三百年程たちて、シリア地方の遊牧民の長、ヒクソスに征服せられて、エジプトは一時其獨立を失へり。

紀元前一八〇〇年頃、新なる王朝テーベ地方に起り、ヒクソス族を逐ひ、エジプトの領地を擴大にし、一時シリアを併せ、メソポタミヤに迄及べり。

紀元前一四〇〇年頃、ラメス二世の王朝は、エジプトの極勢なる時にして、領土いよ〳〵膨脹せり。其後次第に衰へて、遂にアッシリアの版圖に歸せしが、紀元前六〇〇年頃、プサマチック一世

アッシリヤ人を卻け、ニイルの河口デルタ及スエズに都して、諸外國と交通し、就中フキニキア、ギリシア等と交易せり。故にエジプトの文明は多くギリシアに傳はれり。之より後百年を出でずしてエジプトはペルシアの支配に歸せり。

3　建築技藝

イ、スヒインクス　スヒインクスに二種あり。體は獅子にして人頭なるものと羊頭なるものとなり、之れエジプト人の最も崇拜するオシイリスを象りたるものにて、其獅身は腕力の强さを表はし、人頭は智惠の深大なるを表はす。此のスヒインクスはニールの河岸に、或は孤立し、或は列をなして存在せり。就中尤も大なるものは、フーフのピラミットの側に在り。之れは前足を除きて他の部分は全部一ッの岩に刻みたるものにして、身



長十五間、高さ十二間許あり。但今日は大部分は砂中に埋沒され、僅かに頭部を見るを得るのみ。

ロ、オベリスク　オベリスクは四角の長方形なる碑にして、大事件の紀念碑として又裝飾として造れるものなり。重に花崗石にて造り、其の表面に象形文字を刻せり。其の大さは高さ八間より三十間位、幅は五尺より四間なり。

此のオベリスクはローマ人が若干持去り、ローマ市に建てたるが、ローマ帝國の末路に及び、蠻人が或は持去り或は破壞せり現今はコンスタンチノープルに一個、ロンドンに一個、パリス及ニューヨークには十九世紀に入りて作られたり。

ハ、殿堂　エジプト太古のメンヒイス王朝は主として三角塔を作りしが、テーベ王朝は殿堂の建設を始めたり。其の遺跡はテ

ーベのカルナク、ルクソルの二村にあり。何れも規摸宏大にして、カルナクの殿堂の如き七人の王の手になり、完成するまでに五百年を要せしといふ。

**二、三角塔**　三角塔は皇族の墳墓にして、洪水を防ぐ爲めに作られたるもの、多くニイルの兩岸にあり。其の數すべて六十七カイロより六十哩の處に五列をなして存す。三角塔は大抵石造にして、主として石灰石なり。煉化を以てせるものは皆破壞せり。其の最大なるものは、フーフ一世のもの也。フーフは紀元前二七〇〇年頃の人にして、此の三角塔を作るには、十萬人の奴隷を二十年間使役せりといふ。

## 4　宗教思想

**イ、動物崇拜**　エジプト人が最古の信仰は動物崇拜なり。其の



崇拜せる動物は、ハカ、コー等の鳥、犬。猫。鰐魚等なりとす此等の動物を養ふためには立派なる家を作り、上等の食物を與へ、其の死せる時は神として之れを葬る。もし殺すものあるときは、斬罪に處せらる。就中尊奉するはオシイリイス神の表現ある特殊の牛なり。エジプト人は此の牛を稱して、アピイスといふ。之れが發見せられたる時は、七日間祭禮をなして祝ひ、もし死するときは、第二のアピイス發見せらるゝまで國中喪たり

**ロ、自然物崇拜**　自然物のうちにても、殊に太陽はオシイリイスの表現なりとして尤も崇拜さる。其の他、ニール河の流水、及び月も崇拜さるゝ也。

**ハ、特徴**　エジプト人が、宗教思想の特徴は、彼等は死後の裁判を信ぜる事なり。死後の裁判は國王といへども免るゝ能はず

即ち人死すれば、靈魂は直ちに下界に達し、オシリス神の裁判を受けざるべからず。其の法廷には、オシリス神を正面に、左右に四十二人の鬼あり。オシリス神の子ホーラス神は、一個の秤をもちだし、一方に眞理を、他方に死人の心臓をのせて秤る其の差異を見てオリシス神罪を定め刑を科す。重きものは鬼のために心臓を食はる。

## 二、メソポタミア平原の文明

メソポタミアとは、アジアの西方に於て、波斯灣に注ぐ二大流チグリス及エウフラトの間にある平原をいふ。地勢北方に山を負ひ南に開け、氣候温暖。殊に夏になれば、アルメニア地方の高山の雪とけ流れて、河水俄に膨脹し、両岸に氾濫して、肥沃なる泥土を殘すゆへ、五穀よく實り、生活尤も容易なり。



### 1　カルデア

メソポタミアの南方、ペルシア灣に近き處をカルデアといふ。有史以前此地方に住める人種をアカッドといふ。黄色人種にして頗る進歩せる文明を有し居たり。（文字ヲ用ヒ文學アリテ天文地理ニモ通セリト云フ）。

紀元前三八〇〇年頃セム人種が此處に來りてアカッド人と雜婚し所謂太古のカルデア人を作れり。但セム人は全く土着の人種と同化せず。彼等の文明を採用すると共に自國語を維持せり。

紀元前二三〇〇年頃にいたり、ハンムラビ、カルデアの王たりし間は、國威大に振ひたりしが、其後幾何もなくして、アッシリアに亡ぼされたり。

ハンムラビの作りし法典數年前スーザに發見せらる。高さ八尺の黑き柱に刻まれたるものにて、カルデアの楔形文字にて認められ

たり。其の條文は二百八十二條より成り、世界最古の法典たり。

**2** アッシリア　紀元前二二五〇年頃にメソポタミアの北方に起れる純粋なるセム人種の國にして、カルデア其の他南方の國を亡ぼし、更にイスラエル、エジプト等を征服して、アッシリアの版圖は地中海及裏海よりペルシア灣に達せり。其の尤も全盛なりし時は、アッスルバニパル王の時代也。王の治世中は文學美術を奬勵し、チグリス河上のニヌアに都を定め、種々なる大建築を爲せり。然るに王の歿後間もなく昔のカルデアに起りしバビロニアの爲めに亡ぼさるゝ時に紀元前六〇六年。エジプト人が建築の材料は石なりし故、破壞せずして永存せしが、セム人種は主として煉化を用ゐたる故、大抵破壞して殘存するものなく、近來まで其の遺跡に就きて知るところなかりしが、紀元后一八二〇年（我が文政三年）



偶然にもチグリス河のニヌアを發見し、夫れよりニヌア全市を土中より堀りいだしたり。ニヌアは周圍三里餘の長き壁にて圍はる。其の壁は高さ八間厚さ二十間以上あり。國王の宮殿に其の壁の內部に高さ十三間の煉化臺の上に築かる。宮殿の內部には大理石を箝めて夫れに歷代の帝王の軍功を彫刻せり。此の王宮に用ゐたる材料にてエジプトの尤も大なるピラミツト四個を作り得べし。

**3** バビロニア　元アッシリアの一部なりしが、紀元前六二五年其の知事ナボポラサル背きて獨立し、遂にニヌアを陷れてバビロニア王國を開けり。ナボポラサルの子ネブカドネザルに至り、ユダヤ王國を亡ぼしフエニキアを陷れ、一時西部亞細亞に覇を唱へたり。然るに裏海の南に起れるペルシアの爲めに紀元前五二八年亡ぼされたり。

バビロニアの首都バビロンは、エウフラト河に跨れる周圍三里三十町の外廓を有する大都にして、王宮の門には大なる頭の牛の像あり。外廓は廣く且高く悠に牧馬を並行せしむるを得べく、其の外廓の上には二百五十の塔をたて、門は百許あり。此等重要なるものは皆歐州の博物館に保存さる。

## 4 メポソタミアの文化

**イ 學問及技藝**　メソポタミア地方は山少く四方廣濶なる平原なるを以て、天体の觀測に適し、太古に於て已に天文學は頗る發達せり。カルデア人は已に日月蝕を知り、一年を十二ヶ月に分ち、一日を二十四時間となし、一時間を六十分とし、又月の運行によりて七曜表を作れり。天文學の發達と共に數學も亦頗る進歩し居り、後にギリシア、アラビアの諸民族を益せり。



文學はエジプトの象形文字より轉化せる楔形文字にて、之れを瓦の上に彫刻したる術は、中々巧妙にして、顯微鏡の力によらざれば見るべからざるものあり。今日發見せられたる當時の記錄は、皆神話を記せるもの也。

藝工にも色々なる製作物あり。染料や織物類も頗る進歩せるものあり。要するに此地方は東西アジアの中心點なる故、商業工業も盛なりき。

**ロ、宗教**　メソポタミアに於けるセム人種の宗教は、多神教にして、自然物を崇拜す。其の重なる神は、アススルと呼ぶものにして、男女の性を有し、人間の姿をなす。アススル神は戰の神也。神は皆星の中に住むものと考へ、星の運行によりて人間の運命をトせり。元來アッシリア人もバビロニア人も盛に土地

の掠奪をなせるは、其の宗教宣傳の爲めにして、政治的野心の爲めにあらず。故に征服せられたる國にして、彼等の宗教に歸依するものは、之れを亡ぼさずして其の獨立を維持せしめたり

## 三、シリア平原の文明

メソポタミアに於けるセム人種は專ら武を以て國をたて、一切の文化の中心は國家なりしが、シリアの平原に於けるセム民族は之れに反し極めて平和なる人民にして、平和の事業に於て歐州文明に多大の貢献を爲せり。故に西洋史上シリアのセム人種は、メソポタミアのセム人種より重要の地位にあるものなりシリアのセム人種とはイスラエル人フエニキア人なり。

### 1　イスラエル

#### イ、興亡略記

イスラエルとは神の保護者といふ意にて、シリ



アの諸種族がイスラエル人を呼べる名なり。イスラエルは又ヘブライともいふ。ヘブライとはヘリンなるヘブライ語なり。此の語彼岸といふ意味を有す。蓋しヘブライはエウフラト河の彼岸にありたればなり。

紀元前二五〇〇年頃、ヘブライの祖先アブラハムはエウフラトの彼岸にありたるが、後紀元前二〇〇〇年頃カナーン即ち今のパレスチナに移りたるに、飢餓に逢ひて、エジプトのニール河口に移住せしが、エジプト王が虐待せるより、紀元前一三〇〇年頃、其の長モーゼに率ひられて再びカナーンに移れり。併しながら暫くは未だ統一せる政治あらざりき。然るに紀元前一〇九五年頃周圍の蠻族の爲めに壓迫を受け、擧國一致國防に從事せざるべからざりし故、始めて統一せる國家となすの必要を感

じ、王を選びて平時も戰時も其の統治を受くることゝせり。其の最初の王をサウロといふ。第二王をダビデ、第三をソロモンといふ。ソロモンは智者として有名なり。其の子は無道の政を爲せし故、紀元前九七五年頃國内分裂して、ユダヤ及イスラエルの二國に別れ、獨立の政治を爲せるが、イスラエルは紀元前七二二年アッシリアに亡ぼされ、ユダヤは紀元前五八六年バビロニアに亡ぼされたり。ユダヤ人はバビロニアに亡ぼされたる時、悉くバビロニアに移住せしめられしが、後五十年ペルシアがバビロニアを亡ぼせるとき、解放せられて再びカナーンの鄕里に歸ることを得しが、之より後再び國を爲すことを得ずして世界の各處に散在せり。猶太人は商業に巧みにして財産を作るに長ず。故に歐洲人は之れを忌むこと甚し。



**ロ、ユデヤ教**　イスラエル人は宗教に對し極めて熱心なり。彼等は皆アブラハムの子孫なりと信じ、其の種族中より賢明なるものを推戴して族長となし、且神託を受くる資格あるものとして、之れが統治の下に屬せり。族長は豫言者と呼ばる。猶太經典は豫言者の言行錄なり。猶太の宗教は唯一神教にして、エホバの外何物をも崇拜せず。其の宗教の基礎となるものは、豫言者モーゼがエジプトを脫出するとき、シノイ山に於て、エホバより直接に傳授せられたりと稱する十戒なり。

## 2 フエニキア

### イ 興亡略記

フエニキアは廣さ二十六里長さ十里許の細長き國にして、レバノン山脈と地中海との間にあり。同一種族が住みたりと雖、統一せる國家をなせるにあらずして、許多の獨立

せる小街ありて各世襲の君主統治し居り、其の君主の下には二の議院ありて、王の權力を制限せり。是等の獨立せる市は皆聯合し居たり。此の獨立市中大なるものを、シドン市及テル市となす。此の二州は獨立せずして一の聯合王國となせり。後紀元前五七三年ネブガトネザルのために亡ぼされたり。

**□ 商業貿易**　フエニキアの東の方にレバノン山脈ありて、此所より多くの堅き木材を産出せるより、フエニキア人は此等の木材により早く船を造り航海をなせり。其の航海するや專ら海岸に沿ひて行き、日中は太陽の位置により、夜は星の位置によりて方向を定め、先づキプロスに至り、夫れより小亞細亞の南岸ロドス、クレテ、サルヂニア、シチリア、エーゲ群島及イスパニアの海岸、アフリカの西北岸に至り、東の方は迥に北海に



達せり。彼等が海上貿易に於て、取扱へる荷物は、メソポタミア及エジプトの武器。織物。ハヒルスの香料。アフリカの象牙獸皮。奴隷。希臘の陶器。エルバ島の鐵。西班牙の銀、英國の錫。バルチック海の琥珀等なり。又陸上貿易に於ては隊商を作りて、遠くメソポタミアと取引せり。

**八、宗教思想**　セム人種はユダヤ人を除く外は悉く多神教を奉せり。フエニキア人は太陽の神なるボウルを信じ、其他月も星も信仰せり。其の儀式は色々なる果物、鳥獸を供ゆるのみならず人間をさへ犧牲にせり。此の信仰は後にアフリカの西北に迄廣められたり。

**二、ABCの起源**　吾人の今日用ゆるABCは、其の源をフエニキアに發せり。フエニキア人はエジプトの象形文字より作り

其の始めは二十二字なりしが、ヘブライ人は之れを二十三字となし、ギリシア人は更に二十四字となし、ローマに入りて今日の拉丁文字となりたり。今日歐洲諸國の用ゆる文字は、皆ギリシア文字又はラテン文字を元とす。

## 四、ペルシア

### 1 イラン高原の文明

メソポタミアの北方サクロス山脈と、ペルシア灣、裏海の高原との間の土地を、イラン高原といふ。此の地方へ有史以前移住し來りたるものは、アリアン人種なり。此の北方の山多き方に住める人種をメデアといひ、南方に住めるアリアン人種をペルシアといふ。アリアン人種は實にメデア、ペルシアの二種族によりて始めて歐洲の歴史上に現はる。

### 2 興亡略記

メデアはアッシリアを亡ぼして國光大に發揚せしが、其の外藩キロスがペルシア王國を起すに及び、紀元前五五八年遂に亡ぼされ、續いて紀元前五四六年メデアの西隣、リデアも亦キロスに亡ぼさる。（リテアは歐洲の關門たる黑海の南、小亞細亞の西にあり。其の人種はアーリア人種と土着の人種との混合せるものにして、砂金を多く產出して甚だ富裕なる國なり。ペルシアとリデアの合併せるは東方文明の歐洲に入りし原因の一也。）キロスは更に進んで紀元前五三八年バビロニアを亡ぼし、首都バビロンを陷れ、ユダヤ人のバビロニアにありしものを故郷に歸らしめたり。

キロスの子カンビセスは新に埃及遠征を企て、ニール河を越へ、テーベに達し、猶深くアフリカに入らむとして死したり。即ちカンビセスの親戚たるダリウス位をつげり。ダリウス一世は先づ

國内の内亂を平げ、然る後兵を東西に出し、東の方インダス河の邊の諸種族を平げ、西は歐洲に入りてシラシアの地方を征服し、遠くダニウブの北に達せり。是に於てペルシアの版圖は、東は北海裏海より南はエジプト、シリア、メソポタミアを經て印度洋に連り、西は地中海をへて東はインダス河に及べり。其の廣大なる事前後未だ見ざるところなり。此時に當りイタリア半島に國を建てたるアーリア人種は頗る開化して特殊の文化を作り居たるが、ペルシアが歐洲に侵入せむとするにいたり、之れと衝突するに至れり。

小亞細亞のイオニアは、元ギリシア人の起りし處にして、リデアに屬せしが、のちペルシアに歸せり。然るにペルシアの地方官吏が逆政を行ひしより、紀元前五〇〇年反きてギリシアの保護を受



けたり。故にダリウスは紀元前四九五年其の殖民地を平げてのち、ギリシア征伐軍のを起せしも、勝たず。遂に志を得ずして死せり。

クセルクセス一世はダリウスの子なり。父の位を繼き、父の志を繼ぎてギリシア遠征を試みしも利あらざりき。其の後百四十年間内亂相續いて起り、國力疲弊して、紀元前三三四年、マケドニア王アレキサンドルの爲めに亡ぼされたり。

**3　郡縣政治**　ダリウス王は、從來アッシリア又はバビロニアが其の國の基礎堅からずして早く滅亡せるは、主として領土の擴張に伴ふ地方分權を廢めざるによるとなし、斷然從來使用せる封建的の組織を改めて、郡縣政治となし、全國を二十有餘の行政區轄に分ち、其の各區に總督を任命せり。此の總督は司法及行政の大

權を有す。別に陸軍の指揮官ありて兵役を總括せり。猶中央集權の實をあぐるため、都をスザ及ペルセポリスに開き、國内の要所には大道路を作り、通信法を創め、貨幣制度を布き、且檢察使を派遣して各地方の政治を視察したり。

**文學及宗教**　ペルシア人は尚武の民族にして文學の如き之れを顧みざりき。故に文學上の産物は殆ど見るべきものなく、往古代のペルシア人の思想感情を見るべきものは、アベスタあるのみ此書は太古のバクトリア人の信ぜる宗教上の話を集めたるものにして、元二十卷以上ありたるも、今は僅に一卷を殘すのみ。後世之れに註釋を加へたるもの、ゼンド、アベスタといふ。

ペルシアの宗教は二神教にして、紀元前千年頃ゾロアスタルの始めたるものなりといふ。之れによれば宇宙の諸現象は善の神と惡



神との爭ひによりて生ず。すべて光、生命、肥えたる土地、すべての善德、すべての有益なる動物は善神の化身にして、之と反對なる暗黑、死、病、老、砂漠、すべての惡德、有害なる動物は惡神の現はれたるなりと。故に人間の義務は、此有形の一切の惡を地上より亡ぼすと共に、自ら心身よりすべての惡根を除去するをつとむべき也。然しながら後世サクロス山中に住める人種の間に行はれたる地水火風の四元素、殊に火を拜する信仰が、ペルシア固有の二神論中に混入して、其の信仰も餘程異なれり。

## 第二章　ギリシアの勃興と東西文明の融和

**五、ギリシア**

ギリシャ半島は山脈多く交通に不便なりし故、自然幾多の小區域に

分かれ、其の各區域には獨立せる市邑ありて一國をなし、他市を外國として、各自由の生活をなせり。殊に海多くして外國との交通に便利なりしにより、外國文明は早く吸入され、人智の發達速かなりき。有史以前のギリシアの社會を祖神史詩によりて考ゆるに、太古のギリシア人は北海の沿岸や、小亞細亞地方と頗る密接なる關係を有せるが如し。トロイ征伐、アルゴー遠征の如きその好例なり。トロイ征伐とは、ギリシア民族が合同して小亞細亞のトロイなる町を十年間攻擊して遂に陷落せしめたりといふ英雄譚にして、アルゴー遠征とはギリシア民族がアルゴーなる船に乘りて黑海の北の海岸に遠征し黃金の羊を得て歸れる物語なり。此等祖神史詩によりて太古のギリシアの社會を想像しみるに、その東洋諸國と文化の程度を異にするを知るべし。たとへば國王の絕對的專制權、一夫多妻の習



慣、罪人に體刑を加ゆるごとき、東洋諸國にみる蹠の蠻習なりといへども、ギリシアにては太古に於て已に斯る野蠻なる風習なかりしなり。

如斯文明を有する多くの國家が、歷史時代に至りてギリシアの各地に勃興せしが、就中其の尤も大なるものを、スパルタ、アテーネとなす。

## 六、スパルタ

### 1　スパルタの起源

**イ、ドリア族の南下**　スパルタの古き傳說によれば、昔スパルタにヘラクレスなる王ありて、此の地に於けるアケア人を支配せしが、紀元前一一〇四年頃ヘラクレスの子孫はドリア人の援助を得て、アケア人を征服し、此所にスパルタ國をたてたるも

のなりと。

**ロ、スパルタの階級制度**　前述せる如くスパルタは征略により て國をなせるが故に、其の社會には自ら一種の階級制度行はれたり。階級を分けて三とす。（第一）、スパルテート。之れはドリア人の子孫をいふ。專ら政治を司り唯一のスパルタ市民なり（第二）、ヘリエーキー。之れは征服されたるアケア人の子孫をいふ。彼等はスパルタ市外に住み、農工商の業務を營めり。其の身体は自由なれども、參政の權なし。然して納稅及兵役の義務を有す。（第三）、ヘロッス。ヘロッスは奴隷なり。參政權なく、身体の自由なし。スパルタ國の土地に附屬せる耕作器械の如し。

**2 スパルタの國家組織**　紀元前九〇〇年頃、スパルタに立法家



ありて憲法を制定せりといはる。之れリコルゴスの法律なるものにして、之れによれば重なる政治機關は左の三ッなり。

（第一）、國王。他の國と異り國王は二人あり。ヘラクリスの子孫之れにあたる。王は戰時に於ては自ら三軍を統率するの大權を有すれども、平時は政權は他の政治機關に歸し、王は唯虛名を擁するのみ。

（第二）、元老會。元老會の定員は二十八人也。民會がスパルテートの階級に屬する六十才以上の老人より撰び、任期は終身なり。元老會の權力は始めは大なりしが、後世大に縮少せられたり。

（第三）、民會。スパルテートの階級に屬する三十才以上の者は皆議員たるを得るもの也。元老會より廻送し來れるすべての

立法問題を討論を用ゐずして投票によりて決す。

猶スパルタの國是は、尚武勤險にあり。兒童の生るゝや脆弱なるものは山に捨て、強壯なるものは、政府が両親より引取りて寄宿舍に入れ、七才に達すれば國家の有となり、官吏をして訓練せしむ。其の課業は苦難に耐ゆる克己心の涵養武術の練習等なり。然して飲食を奢るは國を弱くする原因なりとて、各人各已に食事を爲すことを禁じ、國家の共同膳部に就かしめたり。又外國品を購求することを禁じ、貨幣はすべて鐵を以て作り、携帶に便ならざらしめたり。

## 七、アテネ

### 1　アテネの起源

### イ、アテネの地理

アテネはアッテカにあり。アッテカは三角



形の半島にして、すべて岩層なるが故に、大理石を産出すれども、一般に瘦せて農工に適せず。此所に三ッの河流あり。其の尤も大なるもの、海岸に近き處に山あり。之れをアクロポリスといふ。此山を中心としてイオニア人住めり。

### ロ、アテネの人民

アッテカに於けるイオニア人を左の三階級に分つ。

（第一）　ユーパトリデイ。イオニア人中の門閥家をさす。貴族なり。

（第二）　ギヲモリ。農夫なり。

（第三）　デミユデイ。商工なり。

アッテカに住む人の中にてイオニア人にあらざるものは、之れを二ッに分つ。

第一　ミテイキイ。之れは外國人にしてアッデカに移住し來り、アテネの法律の保護を受くる人民なり。身体の自由を有するも參政權なし

（第二）　奴隷。奴隷は身体の自由も參政權も其の他何等の權利をも有さず

## 2　アテネの政治

### イ、貴族政治

アテネは元王政なりしが、紀元前十一世紀頃終身のアルポンなるものを門閥家より撰出して、政治を行はしめたり。後任期を短縮して十ヶ年となし、更に紀元前六八二年に至りて、アルポンの定員を九人となし、其の任期を一ヶ年とせり。然して從來アルポンたるべきは或特別の貴族のみなりしが其の資格を擴張して、貴族はすべてアルポンたるを得ることとせり。九人のアルポンの職務は、其の頭領たるべき一人はアテネの國家を代表し、宗教と軍事とを代表するもの各一人、殘る六人は裁判を司れり。

如斯改正ありたれども、富の程度により利害を異にするため、大地主と貧民との爭ひ絶えざりしより、紀元前六二一年ドラコンなる政治家が、市民全体を富の程度によりて分ち、四階級となし、富めるものは、平民と雖參政權を與へしが、猶貴族と平民との爭鬪止まざりき。

### ロ、ソロンの政治

茲に於て紀元前五九四年ソロンなる賢人がアルポンの首座に撰ばれて憲法改正を企て、ドラコンの如く富の程度を以て市民を四階級に分ち、各特殊の權利を與ゆると共に義務を負はしむ。其義務は左の如し。

第一級の市民は軍艦を作るべし。第二級の市民及第一級の市民は平時馬を養ひ一端事ある時騎兵として戰場に赴かしむ。第一級乃至第三級の市民は重裝歩兵として出陣せしむ。第四級の市民は輕裝歩兵又は水兵として出陣せしむ。第一級乃至第三級の市民は戰時には軍用金を負擔せしむ

ソロンの改正憲法によれば、アテネの政治機關は左の如し。

第一、アルポン九人、任期一年なり。其の撰擧は民會が第一級の市民より撰ぶ。第二、民會。民會の議員たるべきものは、すべて二十年以上の市民にして、第一級乃至第四級の市民たるべし。但第四級の市民は官吏選擧權あるも被選擧權なし。第三、四百人會。第一級乃至第三級の市民より三十才以上のものを毎年四百人宛抽籤を以て撰ぶ。四百人會は民會に出ずべき議案を



決定し、其の外諸役所の財政を監督す。第四、アレヲパゴス、失政なかりし退職のアルポンを以て組織す。任期は終身なり。すべて道德宗教及法律を保護し、重罪を裁判し、且國家の安寧秩序を亂すべき法律を禁止するの權利を有す。

猶ソロンは土地及身体を抵當とする貸借を無効とし、富者の土地專有を防ぎ、又官吏はすべて自己の爲せる行爲につき人民に責任を負はず、又人民はすべて選擧權を有することとなれり。乃ち一國の輿論により政治を行ふこととなる。如斯政治上の權利を人民一般の意思によりて行使する政体を、此時より民主主義といふ。

八、ピシストラトス　ピシストラトスは民會の首領として頗る勢力あり。遂に兵をあげてアテネの都城たるアクロポリスを占領し、十數年間潛王(不正ノ手段ヲ以テ王權ヲ握ルモノ)

として政治を行ひたり。彼はよくソロンの憲法を遵守し、之れを善用せし故、彼の治世中はアテネよく治まれり。彼は水道や道路を改築し、文學を奬勵し、ホメロスの詩集を出版し、學園を起すなぞしたり。此の時アテネはデロス島のアンヒキシニアの首座にありてギリシア海上の雄鎮たり。

**二、クリステネスの政治**　ピシストラトスの死後、再び貴族と平民との爭起りたり。クリステネスは貴族なるが深く平民に同情をよせ、紀元前五〇九年ソロンの憲法に改正を加へ、平民の權利を擴張したり。其改正せる重なる點は左の如し。

第一、四百人會の議員數を五百人に增加す。第二、總督十人新に任じ、軍事を司るアルポンと共に、軍の司令官たらしむ。第三、オストラシズムを施行す。之れ一種の保安條例にして、アテネの市民中に、もしアテネ市に害ありと見做さるゝ時、民會議員は貝に其の人の名を記して投票し、規定の數に達すれば其の人を十年間國外に放逐するなり。之れピシストラトスの如き潛王の再び出づることなからしめんためなりしが、後には濫用されて、愛國有爲の士の放逐せらるゝに至れり。



## 八、ペルシアとギリシアとの大衝突

**1 衝突の原因**　ペルシアとギリシアとの衝突の原因は、第四章ペルシアの節に於て述べたる如く、小亞細亞の海岸なるギリシアの殖民地ミレトスは、始めはリデアに屬せしが、ペルシア起るに及び其の領土となりしも、ペルシアの地方官が之れを虐待せしかば、紀元前五〇〇年頃ペルシアに反き、ギリシア之れを助けたるより、遂にペルシアはギリシア征討を企つるにいたれり。

**2** ダリウス王の遠征　ダリウス王は遠征軍を起すに當り、先づ使をスパルタ及アテネに遣し、降服をすゝめ、水と土とを求めしめたり。然るに二國は斷じて戰爭を開くべしとて、ペルシアの使者を殺せり、此所に於てダリウス王は紀元前四九二年大軍を率ひて陸より進み、ギリシア軍を伐ちしも、志を得ずして引きかへせり。

續いてマラトンの役あり。ペルシアの大軍は、紀元前四九〇年、海よりしてアッテカを襲ひ、アラトンの野に上陸し、アテネの大將ミルチアデスと戰ふて大敗す。

**3** ギリシアの軍備擴張　ペルシアの大軍を破れるより、ギリシアの諸國は俄に驕り、戰勝に醉ひて文武備を顧みず、此の時に當りアテネに二人の政治家あり。ペルシアの再擧すべきを說き、國



防を嚴にせんことを主張す。其の一人はアリスチデスにして、他はテミストクレスなり。此二人の論旨は同一なりしも、方法は異り、アリスチデスは陸軍擴張を唱へ、テミストクレスは海軍擴張を說けり。遂に二人の政策の可否を、オストラシズムにより、市民の輿論を問ひしに、アリスチデスの敗となり、彼は放逐せられたり。之れよりテミストクレスは自己の政策を行ふことを得るに至り、盛に海軍を擴張し外墻を修繕し、戰爭の準備をなせり。

**4** クセルクセスの來侵　ペルシアは再度の遠征にも志を得ざりしより、ダリウス王は遂に憤死し、其の子クセルクセス位に即ぎ更に第三回の遠征を企て準備すること四年也。ギリシアはクセルクセスの企を知り、紀元前四八一年、列國會議を開きて、十餘國の同盟を組織し、スパルタを盟主となし、應戰の準備をなせしに

果して其翌年クセルクセスは百萬の兵を率ひ海陸兩面より攻撃し來れり。同盟軍は陸上に於てはスパルタ王レオニダス、テルモピレの要害により防禦したり。折からオリムピアの祭禮にしてギリシアの習慣上戰爭の爲めに、祭禮を廢する能はざりしゆへ、多數は祭場に赴き、戰場に殘れるは少數の兵にすぎざりき。故にペルシア軍が間道を發見して背面より攻撃するや、スパルタ兵は悉く戰死するに至れり。ペルシア人は直ちにアテネに侵入し、アテネ市民は難をサラミス島にさけ、其の海軍を以てペルシアの海軍と戰ひたり。此の時神風起りて、ペルシアの軍艦は皆覆滅し、クセルクセスは辛うして退却することを得たり。翌年ギリシア軍は、プラテーに於てペルシアの陸軍を撃退し、同時に小亞細亞のイオニア海岸のミカレに於てペルシアの海軍を破りたり。之より後ペルシアは復ギリシアを窺はず。



## 九、アテネの盛時

### 1　テミストクレスとアリスチデス

ギリシアがペルシアの大軍を破り得たるは、主としてテミストクレスの功勞による。故に戰勝の後は益々海軍を擴張し、軍艦を作り、アテネはギリシア近海に於ける海上王となれり。乍併後にテミストクレスは權力を濫用して私利を營みしかば、例のオストラシズムによりて放逐せられ漂浪の後ペルシアに仕ゆるに至れり。是より先、アリスチデスはアテネの政治を司り居たるが、デロス島のアポロン神殿を保護する同盟には、彼が高潔なるの故を以て、アテネはデロス同盟の首長に推されたり。アリスチデスは其後民主主義を實行して、第一級より第三級に至るまでの特權を廢し、アテネの市民は何れの階

級を問はず皆役員に任ぜられ、且五百人會員にも撰ばるゝことゝなれり。

**2 ペリクレス時代**　紀元前四六〇年より四二九年までをペリクレス時代といふ。ペリクレスは雄辯家にして且愛國者なりし故、市民に尊敬せらる。彼は權力を利用して政治、文學、美術其の他社會のすべての方面の進歩發達を計り、アテネの勢力は隆盛となれり。彼はすべて公務に從ふものには報酬を與ゆることゝなし、民會の議員も海陸の兵士も報酬を得ることゝなれり。彼は又アテネの市街を飾り、パアテノン其の他の建築物をアクロポリに立て又劇場を築き、文學を奬勵して、市民一般に娯樂を與へ、土木を興して國防を完全にする等、彼の時代はアテネの黃金時代なり。

**3 ペロポネンス戰爭**　ギリシア人の特性は獨立の精神に富むこ



となり。故に外寇ある場合にこそ一致協力もすれ。一度斯る外部の刺激がなくなるときは、各獨立して相下らず。斯くしてスパルタとアテネとの間に激烈なる競爭を生ずるに至れり。然しながらペリクレスの力により紀元前四四五年兩國は三十年間の休戰を約せり。

然るにペリクレスの晩年、紀元前四三一年、コリントの事より遂に兩國は開戰せり。其の戰爭は始めはスパルタは陸軍に於て、アテネは海軍に於て優り、容易に勝負なかりしが、紀元前四三〇年アテネの市内に惡疫流行し、同二十九年ギリシア古今の大政治家たるペリクレスも其の流行病の爲めに死せるより、スパルタの兵はアッテカ半島に侵入し、交戰數年、アテネの形勢頗る危險に迫りたるより、紀元前四二一年五十年間の休戰を兩國の間に約せ

り。

**4　アテネの敗亡**　五十年の休戰條約が未だ滿期に達せざるに、アテネにアルキビアデスなる策士ありて、シニリカ島のシラキユースなるドリア人の殖民地を襲ひ、此所にアテネの海軍根據地を作り、之れを中心として地中海の西方にアテネの權力を擴張し以てスパルタの武力を挫がむとする策をたて、雄辯を振つてアテネの市民を說服し、遠征艦隊を派出せしが、之を聞いてスパルタは、同じドリア族たるシラキユースをアテネの侵略に委する能はずとなし、遂に紀元前四一五年再び開戰するに至れり。此遠征の結果は、アテネの失敗に歸し、アテネの海軍は連戰連敗し、加ふるにアテネの市內に於ては、貴族と平民との軋轢絕えざりし故、アテネは內憂外患に苦しめられつゝ、惡戰を繼續したるが、遂に紀元



前四〇五年、アテネの海軍は、エゴスポタミなるペレスポンタスの海上に於て、スパルタの大將リサンデルに亡ぼされ、其の翌年アテネの城も亦リサンデルに亡ぼされ、軍艦は沒收せられ、城壁は破られ、スパルタ政府の建てたる貴族政府がアテネに設けられ、スパルタの兵士がアテネを警備するに及び、アテネの權威全く地に墜ち、殆ど獨立の實を失へり。

## 一〇、スパルタとテーベ

**1　スパルタの全盛**　アテネ亡びて、スパルタはギリシア全國に覇を唱ふ。尙武の國たるスパルタは、猶武威を輝さんため、ペルシアに戰をいどみ、交戰數年に及びしも、遂に克つ能はず、紀元前三八七年、アントルテデスなる使節をスーザの朝廷に送り、媾和條約を結ばしめ、小亞細亞海岸諸市及キプロス島を割讓せり。

茲に至りて多年の騒亂鎮まり、ギリシア全土皆スパルタの武力に屈し、スパルタの建てたる貴族政治はギリシア各國に行はるゝに至れり。但當時のスパルタは昔日の剛毅不屈の風全く衰へて、都人士は奢侈に耽り、貧富の懸隔甚しく、怨聲隨處に滿てり。

**2　テーベの反抗とギリシアの衰微**　スパルタが專横に對して第一に反抗したるはテーベなり。テーベは紀元前三八三年スパルタの爲めに都城を占領せられしかば、エパミノンダス、ペラヒダス等の愛國者は私かに獨立を企て、遂に紀元前三七九年スパルタ人を追ひ却け、續いて紀元前三七一年スパルタ兵をリユークトラに破り、夫より屢ペロポンネサス半島に於けるスパルタの領土を奪ひたりしが、紀元前三六八年ペロピダス戰死し、次いで紀元前三六二年マンチネアの戰爭に於て、エパミノンダス戰死せしより、



テーベ市民を統御する人物なくなり、遂にテーベも亦衰へたり。此等久しき戰爭のために、ギリシア全國は皆疲弊して、又昔日の勢なく、遂に北方に起れるマケドニアの爲めに全國悉く併呑せられたり。

## 二、マケドニア

**1　西洋文明に於けるマケドニアの地位**　マケドニアはギリシアの北方にある山國にして、其の人民はギリシア民族なり。詳しく言へばギリシア人種の血液と當時其地方に存在したる土人の血液とを混合せるものにして、ギリシアのオリンピアの祭禮に參列することを許され居たり。

マケドニアが獨立の王國として歷史上に現はれたるは、紀元前八世紀頃よりなるが、紀元前四世紀フイリポの二世の時に至り、勢

力俄然勃興して、ギリシア全土を併呑するに至れり。

從來ギリシア文明の行はれ居たる區域は、ギリシア本土を始め、南部伊太利、マグナギリシア及エーシ海中の群島、小亞細亞の西海岸にすぎざりしが、マケドニア起るに及び、更に亞細亞の西方を併せ、殆ど印度に達する廣き區域の間にギリシアの言語風俗其の他色々なる文明を輸入せり。之れマケドニアの西洋史上重要なる地位を有する所以也。

**2　フイリポ**　フイリポがギリシアの覇王たらんとする志ありて盛に兵士を養成し、武備を講じ、以て其の機會を待てり。當時ギリシア全土久しき内亂につかれて、又武を唱ふるものなかりしかば、フイリポは先づ其の内政に干渉する口實を得むと欲し、デルホイのアンフイクチオニアに關係し、遂に其の總裁となり、切り



に南進の策をめぐらせり。時にアテネにデモステネスなる雄辯家ありて、フイリポの野心を看破し、極力之を非難し、市民を說きて之れに對抗する策をたて、ギリシア連合軍を組織して、ケーロニアにマケドニア軍を擊しめしも、フイリポが强勇の兵に勝つ能はず、ギリシア軍大敗せり。茲に於てかフイリポは紀元前三四八年を以てギリシア全土を占領したり。猶彼は昔日の仇を報ひんがために、ギリシア人を率ひてペルシア侵入を企てしが、其準備中刺客に殺されたり。

**3　アレクサンドル大王**　アレクサンドル大王の父の位を繼げるは、年僅に二十才なり。ギリシアの諸國は彼の若年なるを侮り、此の機に乘じて兵をあげしが、大王忽ち之を平げたり。夫れより父の遺思によりペルシア遠征を企て、紀元前三三四年、マケドニ

ア及ギリシアの兵を率ひて、ペレスポンドの海峽を渡り、小亞細亞に行きてペルシヤ軍を破り、シリアに侵入してフニキア軍を平げ、更にエジプトに入りて之れをも平げたり。ニール河口のアレキサンドリア港は此の時大王の開けるものにして、今日猶東西交通の要路たり。紀元前三三一年更にペルシアに迫り、アルベラにペルシア王ダリウスの大軍を擊破して、ペルシア全土遂に大王に歸せり。然しながら大王は之を以て滿足せず、猶印度の征略を謀り、ペルシアの砂漠を横切りて今のトルキスタン邊を通過して、インダス河を渡り、信河々孟の諸國を征服したり。此時遠征の將士皆戰爭に厭き、歸國を望みしかば、大王已むを得ず凱旋せんとし、其の軍を三分して、第一軍を船にのせて、インダス河を下り印度洋をへて、ペルシア灣よりユーフラット河口に達し、更に河



を遡りてバビロン府に歸らしめ、第二軍はペルシアの荒原を横切りてバビロン府へ行かしめ、第三軍は大王自ら指揮して印度洋の海岸に沿ひて、バビロンに歸れり。此後大王はバビロン府を自己のたてたる大帝國の首府とせんとし、經營するところありしが、事業未だ央にして、酒色のため病を得て紀元前三二三年死去せり時に年三十二也。實に彼は十三年間在位中殆ど遠征に日を送りしなり。

大王が遠征の目的はギリシア文明を布及するにありき。乍併其の結果はペルシア文明とギリシア文明、之れを概言すれば歐洲と亞細亞との東西文明の融合を招き、世界歴史に大影響を與へたり。大王ペルシアを平定せるのち、自らダリウスの後嗣を以て任じ、ダリウス王の長女を娶りペルシア人を任用し、ペルシアの衣服を

着用し、ペルシアの朝廷の儀式を用ゐ、且其の部下をしてペルシアの女子を娶らしめ、以てペルシアの人心を收攬すると共に、自ら東洋專制國の君主たらんとせり。斯の如くにしてギリシアの言語、風俗學術技藝は思ふがまゝに東方に輸入せられしと同時に、ペルシアの文明も盛にギリシアに入れり。又大王は遠征の途に於て數多の殖民地を設けギリシア人をして支配せしめたるが、此等の新都會は之よりして貿易上重要なるものとなれり。

**4 アレキサンドル大王の歿後**　大王は武人としては絶大の大將なりしが、政治の才を缺ける故、其死後國家は忽ち分裂せり。大王二人の子ありしも、何れも幼少なりし故、武將等政權を握りしが、此等の將軍中或は大王の孤兒を擁立せむとせしものありしといへども、多數は各自の領地に割據して獨立せむとするものなりし故、遂に內亂を生じ、十二ヶ年の久しきに亘りしが、結局紀元前三〇一年アイパソスの戰爭により、マケドニアはマケドニア、シラキア、シリア、エジプトスの四大國と、ローデス、ペンタスパアゲマス等の小國に分れたり。



**5 マケドニアとギリシア及びエジプトとシリア**　ギリシアはデモステネスの下に獨立運動をなせしも、マケドニアに破られて成らず。アケドニアは紀元前一六八年ローマに併呑さる。シリアは一時榮へたるも紀元前六三年ローマに併せらる。

エジプトは大王の將フトレマイオスの建てたる國にして、アレキサンドリアに都し、ギリシア、エジプトの文明を吸收し、其都は十六世紀迄榮へたり。フトレマイオスは學術、技藝を奬勵し、王宮に屬せる大理石を以て博物館を建て、其內に又當時世界無比と

稱せられし大圖書館を設け、エジプトは勿論、遠く東洋の書物迄も集めたり、又動物館あり、天文臺あり、數學、天文學、哲學を始め百科の學悉く此所に發達進歩せり。ユデヤの經典のギリシア語に譯されたるは此の時代也。

斯くてアレキサンドリアはギリシア滅亡後、西洋文明の中心點となり、殆ど二百餘年榮たるが、遂に紀元前三〇年エジプトはローマに併されたり。但アレキサンドリアは猶依然として學問の中心點なりき。

## 三、ギリシアの文明

### 1 其進歩の原因

（一）餘裕ありし事。　衣食足りて禮節を知る。ギリシアの文明の進歩せるは、ギリシアが富みて餘裕を生じ文藝を鑑賞し得たるによる。即ち屋外の勞働はすべて奴隷に任せ



富者は唯遊樂に日を送りたる故、自然文明の進歩を爲せる也。（二）各洲の競爭　ギリシアは地勢上各國分立したる故、諸國の間に激烈なる競爭たえざりき。これ亦ギリシアの文明進歩に大功あり也。（三）交通の便利　交通の盛なりし事亦ギリシア文明の進歩に大功あり。エジプトバビロン等の當時の先進國と交通して其文明を輸入せること少々にあらず。

### 2 學術

**1、文藝**　文藝はギリシアの誇なり。詩人文人甚だ多しその重なるものをあぐれば（一）ホメロス　其生死は明かならず、紀元前一〇〇〇年頃の人なりといふ。作物はイリアッド及オヂセイ著名なり。（二）エスキルス　悲劇作者として有名なり、作物七十餘種あり。（三）ソフオクレス。（四）ユリピデス。

ロ、哲學　西洋哲學はギリシアに其源を發す。哲學者の著名なるものをあぐれば(一)ソクラテス(二)プラトン(三)アリストテレス

ハ、歴史　歴史家にはヘロドタス、ツシヂデス、クセノフオン等なり。

二、理學　數理學者としては、エウクリデス、アルヒメデス等あり。

3　美術　ギリシア美術の粹はアテネにあり。之れアテネに於ては夙に人民の權利を重じ思想の自由を認めたる故すべての方面に新發見ありしが就中美術の發達は怖ろしきものなり。

イ、建築　西洋の建築法はギリシアに基く。其樣式に三あり。第一はドリア式なり。極めて質素なる建て方にて柱に基石なく



且飾なし。第二はイオニア式なり。第三はコリント式。

ロ、彫刻　彫刻の發達は建築に伴へり。神殿には神代史上の神々及び歴史上の英傑の像をたてたり。パテルノン堂のアテナ女神像、オリンピア堂のゼウス神像等有名なり。

ハ、演說　演說はギリシア政治家の得意とせる所也。雄辯にあらざれば市會議事堂に於て市民を動かす能はざれば也。有名なるはデミストクレス、ペリクレス、アルギビアデス等あり。

## 第三章　ローマの勃興

### 一三、イタリア半島の文明

1　イタリアの住民　イタリア半島には早く諸種族來り住めり。其南部にはギリシア人あり。北部にはケルト民族ムガリ人あり。中部にはイタリア民族あり、以上は皆アーリア種族なるが、唯エ

トルリア地方にのみエトルスキと稱する異種族住へり。

イタリアの住民は、アーリア人及非アーリア人の二に分ち其外エトルスキあること前述の如し。エトルスキ人は何人種に屬するや明ならず。ラテンムの北方に居りて、ローマが都を建てたる頃は既に迥かに進歩せる文明を有したりき。今日殘存する彼等の古墳を見るに、其工藝上の技術亦精巧を極めたり。彼等の信せる宗教は頗る怖ろしきものにして、其神は死者の世界の土の下に住み、時々娑婆に出で生きたる人間を脅し、時としては害を加ふることあり。此神を慰むるには人間の犧牲をなす。此習慣は後にローマに入りて闘士となりたり。又エトルスキ人は色々なる現象によりて卜筮をなし、ローマ人以前に卜者を有せり。之を要するにエトルスキ人の文化は、ローマ人より迥に優れり。ローマの文化は彼



等に負ふ所多かりしなるべし。

## 2　ギリシアとイタリア

ギリシアに居たる人種と、イタリアに居たる人種とを比較するに、吾人は一の差點を發見す。即ちギリシア半島の住民は全くギリシア人種のみなりしが、イタリア半島の住民は種々雜多なる人種を含めること也。

又ギリシアとイタリアとの國情を比較するに、一の重大なる差點あり。即ちギリシア半島は山脈國内に縱横し、數多の小國に此の半島を區劃せしが、イタリア半島は地理上の形勢全く之に反し、北にアルプス山を控へ、中央にアペニン山脈を有する外、此の國を區劃するものなき故、國を統一するに便利なり。然してイタリアの人種中重なるものは、ラテン人なり。イタリアの歴史は彼等の支配する處なり。

3 ローマの階級　イタリア民族中、チベル河とトレルス河との間のラチウムに居たるラテン民族は、尤も重要なるものなり。此民族の領せしは、ローマ市以下三十市なりき。

當時のローマの階級は三に分つ。(第一)貴族　貴族とはラムネス、チチース、ルケレスの三民族に屬するローマ、土着の人民にして、身体の自由及政權を專有す。(第二)平民　平民とは外國より歸化せるか、又はローマに征服せられたる國の人民をいふ。身体の自由を有すれども、政治に與るを得ず。(第三)奴隷　奴隷とは重に戰爭にて捕虜となれる者なり。身体の自由及參政の權利を有さず以上を以て見れば、ローマの社會組織は頗るアテネに似たり。從て二國の社會上の變遷も亦殆ど相類似せり。

ローマは家族主義の國なり。家首は家族の生殺與奪の權を有す。



系統同じなる數家族合して一の氏をなす。同一祖先なる數氏合して一の姓をなす。たとへばカイウスユ、リウス、ケーザルといへば、カイウスユは字、リウスは氏、ケーザルは家なり。

4 ローマの宗教　ローマ人の宗教も亦萬有神教にして、萬象は神の司る處なりと信ぜり。又神は無數にありて、各男女の性を有し、各司るところの職分を異にせり。

ローマ人は祖先の靈をベスタ宮に祭り、主神ジュピテルの社をローマ市の中央なるカピテル丘に建てたり。彼等はギリシア人と同じく吉凶禍福は皆前兆あるものと信じゐたるより、特に官吏を設けて偶然の出來事には神意を判斷せしむ。其官吏をオーグルといひて六人あり。綜して公私の事を行ふに當りオーグルに問ひ、而して後可否を決するを常とす。若し一國の起廢に關する如き大事

には、人をデルフオイに派して其神託を乞はしめたり。オーグルは始めは貴族のみなりし故、彼等は之を政治上に利用して私利を計りしより、ローマの政治は少からず茶毒を流したりき。

ローマ人が信ぜる重なる神は、下記の如きものなり。(一)ジユピテル　ジユピテルは神の父にして、すべての神を支配す。(二)ユーノー　ジユピテルの妻にして、凡そ母たるべき事を司る神なり。(三)ミネルバ　アポロンと同じくミネルバは學問及美術の神なり。(四)マース　軍の神なり。ローマ人はマース神の爲めに毎年正月必ず大祭を行ふ。然して正月をマースといふ。今日といふは是に基く、男神なり。(五)ベルロナ　女神にして軍の神なり。(六)ベスタ　ローマの國家を守護する神なり。ローマ人は殊に殿堂をたてゝ六人の處女をして絶えず神前に火を焚かしむ。(七)マーキユリイアス　商業の神なり。(八)ネプテユリス　海の神なり。(九)オーロラ　曙の神なり。



以上掲げたるものゝ外、有形の現象たとへば山川草木等の事物を司る神あるのみならず、人間の一舉一動を支配する神あり。又物の性質儀式等を司る神たとへば成年、結婚を支配する神あり。ローマ人の神の觀念は、神は凡て自然力の一を支配するものにして、神の思想によりて人に對し善惡を爲すを得るものといふにあり。ローマ人は始めは神を現はすに人間の如き形を以てせず、單に表徴を以てせり。たとへばシユピテルを表はすに石を以てし、マースを表はすに劍を以てせるが如し。然るにギリシア人の作れる種々なる偶像の入るに及びて、之を摸して色々なる形をつけたり。ローマ人の神を祀るや、先づ自己の利益の增進を祈る。其の宗教

上の儀式は莊嚴なり。一家にては家首。一國にては特にポンテフなる役人をおきて儀式を行はしむ。ポンテフは又曆を作る。

## 一四、ローマの建國以前

### 1 最初の政体

ローマは紀元前八世紀より王政なり。其政治機關は左の如し。

(第一)國王　國王は貴族中より貴族會員が選ぶ。故に一種の共和政治なり。(第二)元老會　元老會は家族の首長を以て組織す。前述せる如くローマの市民は三つの姓に分れ、姓は十の族に分れ、族は百の家族より成る。故にローマの市民は三百の家族より成る。總ての家族の首長は元老院に出席する故、元老院の議員は三百人なり。元老院は始めは唯の顧問たるに過ぎざりしが、次第に權力增加して共和政治時代には頗る有力なる團体となれり。(第三)貴族會　貴族會は男子の武器を有する者より成る。和戰を決し、法律を制定す。(第四)兵事會　初めローマに於ては貴族のみ政權を握り平民は義務を有するに過ぎざりしが、王政の末年、市民は兵事會を組織し、貴族平民を合して所有財産によりて五級に分ち、財産に比例して納稅兵役の義務に輕重を附せり。



### 2 政體の變化

此時に當りローマは屢近國と兵を交へたり。平民は軍費を負擔せざるを得ざる故、戰爭の爲めに財産を蕩盡し、負債を起し、引いては身体の自由をも失ふものあるに至りたるより、先づ貴族より政權を奪ふ必要ありとなし、紀元前四九四年平民は大示威運動を試み、一同ローマ市を退去せんとせしより、遂に政治機關に左の如き大變動を起せり。

(第一)執政　市民は紀元前五〇九年王を廢して二人の執政を置け

り。其任期は二年にして、貴族中より兵事會が選擧す。執政の權力は王政時代の王に等し。(第二)命令者　國家の大事に際し臨時に命令官を置きて、其難局に當らしむ。其任期は六ヶ月にして、貴族中より選擧す。但難局去れば任期中と雖も辭職するを要す。又其任期中は一切の機關を彼が自由に任す。(第四)平民會　紀元前四九四年平民が貴族に迫り設けさせたるものにして、純然たる平民の機關なり。

(第五)保民官　保民官は其數九人にして平民會之を選ぶ。平民の輿論を代表し貴族に對抗す。

**3　平民政治**　平民は如斯新權利を得たれども未だ貴族と同權にあらず。故に平民は猶貴族と爭ひを熄めず。遂に當時成文法なかりし故、平民は貴族に迫りて法典編纂を行はしめたり。即ち十人



官を選び、之に執政以上の權利を與へて法典を編纂せしめ、遂に後世法典の基礎となれる十二銅表を作れり。然しながら之は唯從來の貴族平民の權利を擴張せるに過ぎずして、平民は依然政權を得ざるより、猶貴族に迫り、紀元前四四五年、貴族と平民との結婚の自由を許し、更に兵事總督を新設して、平民より選び、執政に等しき權利を有せしめたり。平民は猶滿足せず、屢貴族に迫りて紀元前三七六年保民官リキニウスは執政二人の中一人は平民の中より出すことに要求し、長き貴族と平民との爭ののち、紀元前三六七年、遂に貴族の同意を得たり。

之よりすべての官職は平民にも與へらるゝに至り、平民の地位漸く高まれり。紀元前四世紀には平民の僧侶たるを許され。又紀元前二八四年には負債の爲めに身体の自由を束縛する習慣を全廢し

茲に於て平民と貴族とは全く同一の地位に立ち、ローマの共和政治はいよ〳〵盛になれり。

**4 ローマの征服**　ローマは貴族と平民との軋轢により、外交を等閑に附せしより、北部イタリアのガリ人先づローマ市に闖入し近隣の諸族切りに刼掠を恣にせしより、ローマ人は貴族と平民とが一致して外敵にあたり、先づサムニテ人、エトルスキー人、ガリ人を屈服せしめ、更に南部イタリアの各地を陷れたり。ギリシア殖民地の中タレントム市のみ最後まで抵抗したるが、エピルス王ピルスが紀元前二八〇年ヘラクリアに於てローマ軍と戰ひ、一端勝利を得たるも、再戰して大敗せしより、遂にタレントム市は紀元前二七二年ローマに降れり。茲に於て、ルビコン、アルノ兩河の南には、ローマの命令よく行はれたり。



**5 ローマの統治**　ローマの政治は中央政府たるローマ市民が全國に對する統治なり。即ちローマ市は其大共和國の中心として主權者の地位に立ち、其領土中にある無數の都市を總宰せるなり。ローマ市民を大別すれば、市民權を有する者と有せざる者との二となる。前者はローマ市民たる貴族平民及外國よりの歸化人にして、後者は奴隷なり。貴族と平民とは完全なる市民權を有す。市民權とは公權及私權を併有することなり。

公權とは、(一)宣戰媾和を議決する權。(二)官吏を選擧する權。(三)官吏に選ばるゝ權。私權とは、(一)土地財產を所有し之を賣買する權。(二)婚姻の自由權。

ローマが統治せるイタリア半島內の都市を分類すれば、完全なる市民權を有するものと、有せざるものとの二大別となる。

(第一)完全なる市民權を有する都市　之れ共和政府が指定せる土地に移住せるローマ市民の殖民地をさす。多くは軍略上の必要より要害の地に設けられ、移住民は皆家族を携へて、此所に生活し且國防に從事するなり。此等移住民は昔のローマ市に於ける貴族の地位に、在來の土民は平民の地位にたち、移住民の支配を受くるものとす。移住民は首府たるローマと同一の共和政を布き、共和政府を建つ。自身はローマ市民として公私の權を有す。唯ローマ市民と異なる處は、ローマ市民としての市民權を行はむとする時は、身自らローマ市へ行かざるべからずの一事なりとす。

(第二)完全なる市民權を有せざる都市　(甲)ソキイ又はアライス之れを又二つに分つ。(A)はローマ市民たるの私權は認むるも公權を有せず。其ローマに對する關係は殊に條約に依りて定められ



都市自ら獨立の憲法を有し、ローマ市の干渉を受けずして官吏を任命するの權を有す。但ローマの大事に際すれば軍事費を負擔し又兵士兵器を供給する義務あり。又媾和宣戰の權利なし。(B)は自己の政治上の事にも全くローマ市の指揮を受く。又重なる官吏はローマ市の任命するところなり。故に私權を有するのみにして全く公權を有さず。斯る都市の主席の官吏をプレフェクトといふ

(乙)ラテン殖民地　ラテン殖民地とは、ローマ市が征服せる土地に、ローマ市民中の貧者を移住せしめ、之に其土地を分配して、彼等を主治者として其都市を統治せしむる一種の殖民地なり。但斯くして移住せる者は完全なるローマの市民權を有せず、僅かに私權を有するのみ。此等の殖民地は、統治上の必要より配置さるゝものにして、地方都市の反圖を謀るものを探偵する職分を帶ぶ

故に此等殖民地と都市との間には立派なる道路ありて、連絡を保てり。此種の道路中尤も有名なるものはVia Appiaなりとす。此道路はローマ市より、カパーなるローマの南の都迄にして、紀元前三一二年落成せり。其道路の全体は平なる石を一面に敷き處々に里程標たつ。此の道路は今日猶存し、土木の技術の巧妙なるは、老練なる技師をも驚かすといふ。

## 一五、地中海々上の覇權

### 1 カルタゴ

地中海は亞細亞と歐羅巴との交通路なる故、此の海上權を握る者は、歐亞二大陸に覇を稱ゆるを得べし。之れローマ史を讀む者の特に注意するを要するところなり。

ローマが漸く盛ならんとせし時、地中海上に勢力を有せしは、カルタゴなり。カルタゴは紀元前九世紀頃、ヘキニキアのツールが



建てたる殖民地にして亞弗利加の今のテニスに位し、シリアの島を隔てゝ迥かに伊太利半島に對せり。此港は首府なるツールを經て地中海の南に通商貿易を營み、ローマ起れる頃は國勢頗る盛なりき。カルタゴの政体は共和政体にして、大統領二人あり。其下にカルタゴの主なる貴族を以て組織せる元老會あり。此國は上下よく和合せるを以て數百年間何等の爭鬪もなく平和に商業を營めり。カルタゴ人の宗教はフェニキア人と同じく、火神ポールを崇拜し、人間の犧牲を捧げたり。彼等は地中海の南岸到る處に殖民地を有し、シリアの一部分にも根據地を有せり。今や伊太利半島を統一せるローマと、僅にシチリア海峽を距てゝ相對するに至れり。

### 2 ローマとカルタゴの衝突

イ、第一回ポエニ戰爭

ローマとカルタゴとは早晩衝突あるを豫期せられしが、紀元前二六四年、ローマ人がシチリアの一部を占領せしより、遂にポエニ戰爭を惹起せり。

カルタゴは海軍を以て勝り、ローマは陸軍を以て勝れり。交戰數回、ローマ軍は常にカルタゴの海軍に苦しめられしかば、新式の軍艦を造りて（艦首に釣橋を作り之によりて敵艦に侵入せんとするなり）カルタゴ軍を破る。カルタゴは遂に和を請ひ、シチリア島を割讓し、巨額の償金を支拂へり。ローマ人は捷に乘じてサルヂニア及コルシカの二島を占領したり。

之より先カルタゴにハミルカル、バルカスなる者あり。國運の漸く傾けるを見るや、自ら財産を抛ちて、其一族を率ひて、紀元前二三四年イスパニアに上陸し、獨立經營に任し、イスパニア半島の東南に在る金山及銀山を發見し、傭兵をして發掘せしめ、夫より得たる利益を本國に送りて、本國の財政を助くること前後九年。半島經營の功、漸く見るべきものありしが、不幸反徒の爲めに殺され、其婿ハスドルバル其業を繼續せしが、此人亦紀元前二二一年戰死。ハニンバル二十八歲にして父の業を繼ぎ、先づローマ人の保護するイスパニア海岸の都市を陷れて、ローマに挑戰したり。



ロ、第二回ポエニ戰爭

紀元前二一八年の春、ハンニバルは新カルタゴより進發して、ガリアを經てアルプ山を踰え、北部伊太利に入る。往々ローマ兵を破り、カルタゴ軍の勢破竹の如し紀元前二一六年ローマの大軍を敗り、ハンニバルは南部イタリアに冬營して、援軍の到るを待てり。是より先ローマは其將ス

キピオをアフリカに赴かしめ、カルタゴの本土を攻撃せしむ。カルタゴ軍大敗、直にハンニバルを召還す。紀元前二〇二年兩軍ザマの野に戰ひ、スキピオ大勝を得たり。

カルタゴ遂に和を請ひ、イスパニア及、地中海諸島をローマに讓り。戰艦をローマに渡し、償金を出して、以後宣戰媾和は皆ローマの指揮を受くべきを約す。

八、第三回ポエニ戰爭　ローマのカトーはカルタゴに行き、其商業貿易の盛なるを觀て、大に驚き、カルタゴを亡ぼさゞればローマの安危に關することあるべきを主張するに至れり此時に當りカルタゴはローマに計らずして隣國と戰爭せしかば、ローマは之に籍口してカルタゴ人の兵器を押收し、更にカルタゴ人を他所に移住せしめんとせり。カルタゴ人は其不條理なるを憤



り、死を決してローマ軍を擊退するに決し、苦戰すること四年に及びしが、遂にローマの將スキピオエミリアヌスに亡ぼされ市街を燒かれ、土地をすべて桑田となせり。實に紀元前一四六年なり。

二、カルタゴの敗因　第一のポエニ戰爭の結果、カルタゴは其領地の幾部分を失ひたれども、猶完全なる獨立を有せり。第二回ポエニ戰爭の結果、カルタゴは內治上の獨立を有するも、外交上は全くローマの統治の下に立つ事となれり。即ち半獨立國たり。第三回ポエニ戰爭の結果、カルタゴは全く獨立を失ひ、其生存せる者は奴隷に賣られ、其市街は全く破壞さる。何故に一時ローマを凌ぐ勢力ありしカルタゴが斯く脆く滅亡せるか。其原因二あり。(一)カルタゴの人民は種々なる人種の結合より

なりたる故、感情の統一を缺ける事(二)カルタゴの兵制不完全なりし事。カルタゴにはローマに於ける如く完全なる軍事上の組織なく、兵士は皆傭兵なりし也。

3　ローマの地中海征服

イ、地中海東岸の征服　マケドニアはカルタゴを援けて、ローマの保護地を攻撃せしより、ローマ軍之を征討し、紀元前一六八年、再叛するに及び、遂に之を全滅せり。而して、シリアはスキピオに征服せられ、ギリシアにては、コリント市アテネ敗亡後、獨り繁榮しけるが、紀元前一四六年ローマに反抗せる故ローマ軍の爲めに破られ、全市を破壞されたり。續いてローマはギリシア全土を平定し、ローマの一地方とせり。

ロ、イスパニア征服　紀元前一三二年、スキピオ、エミアヌス



はイスパニアに侵入し、マンチアを陷れて、イスパニア全部をローマの所有とせり。

吾人が普通ラテン人種と稱するものは、イタリア、フランス、イスパニア、ポルトガルの四國を重にさす。此四國の中ローマより文明の早く輸入されたるは、イスパニア、ポルトガルにしてローマの言語、風俗、宗教は次第に此等蠻民を文明化せり。イスパニアがローマの領土となりたる故、地中海沿岸皆ローマの統治に服することとなり、獨りエジプトの獨立せるあるのみ。

## 一六、ローマの衰運

1　戰捷後のローマ　ローマが地中海岸に其領土を擴張するや、國力俄に發展して、ローマの社會に非常なる變化を及ぼせり。(第一)ローマ人の奢侈　ローマ人はギリシア、カルタゴの如き諸先

進國のあらゆる財貨珍寶を掠奪して、悉くローマに持ち來りたり故に一般人民は此等奢侈品の輸入により頗る贅澤となれり。

(第二)貧富の懸隔　戰爭によりて捕へたる奴隷、及び戰敗國民を奴隷としてローマ市に移送せるより、奴隷は激增して、ローマ市民よりも多數となれり。故に富者は一萬二萬の多數を養へり。當時のローマの富の程度は、三人の奴隷を有せざれば貧民とされたり。故に奴隷の增加は奴隷相場を安くし。大地主其他の資產家は之を買占め、其安き勞働によりて、益々富むに至れり。又ローマが新に得たる土地は、其三分の一は政府の所有たる法律ありしが富豪等は種々の運動を爲して之を私有し、牛馬に等しき奴隷をして耕作せしめたり、斯くして富者は益々富を重ね。別莊を作り、妻妾を蓄へて、奢侈をつくし、反對に小地主、小作人等自己の力



によりて生活するものは、次第に富を失ふて、遂には遊民となるもの無數也。殊にシリア島に產する安價の穀物が輸入さるゝに及び、小農夫等は職を失ふに至れり。

以上は紀元前一三〇年前後の有樣にして、イタリア全土は、社會上經濟上、富者と貧者との二階級に分れ、此間爭ひ絕ゆるときなかりき。

## 2　グラックスの改革

此時に當りローマにグラックス兄弟あり兄をテビユス、弟をガイアスといふ。彼等は貧民を救はむとしてテビユスは先づ保民官となりて、熱心に運動せる結果、ローマ市民の所有し得べき土地を制限し、公有地を貧民に所有せしむべき土地分配法を制定せしめたり。是が爲めに貴族の忌む所となり、遂に其毒手に倒れたるより、弟ガイアス繼ぎて保民官となり、種

々貧民の爲めに盡すところあり。市場の穀物を貧民には半價にて賣拂ふ法案を議定せしめ、又イタリアの市民權を擴張して、他の都市にも及ぼさんと企てたるが、又々貴族に憎まれて其殺す所となる。

グラックス兄弟は今日の社會主義者にして、貧民を救助することに盡力せしが、其穀物分配法は後に至りて平民一般を精神的に殺す結果となれり。此分配法により分配を受くべき貧民は次第に增加し、共和政府の末年には其數三十万を超えたり。是が爲めに穀物の産地たるアフリカ其他ローマの外領は非常に疲弊したるのみならず、施米を受くべき貧民は政府の保護を賴みて懶惰となり、種々なる惡事を働き、又貴族社會には賄賂公行して、道德全くすたれ、上下あげて利益の外何物をも顧みざるに至れり。



3 ソキイ即ちアライスの市民權取得　既に述べたる如く、ローマの都市中ソキイ即ちアライスは、完全なる市民權を有せざりしがグラッコスに繼ぎて保民官となれるダリサスが紀元前九一年、イタリアの各都市に市民權を許可せんとする法案を提出したるを機とし、ソキイは連合して中央政府に迫り、市民權を得むとせり。然るに、元老院は之に同意せざりしより、ソキイは同盟して叛旗をあげたり。是に於てヌミヂア王ユクルタを討ちて大功ありし執政マリウスは之を追討せるも効少く、遂に紀元前九〇年ローマは此ソキイ同盟に加はらざる都市に市民權を許し、又たとへ同盟せるものも六十日以内に武器を捨たる都市には、すべて市民權を與ふることを約束し、紀元前八九年ソキイ全部ローマに降服して亂全く熄む。斯くてイタリア半島の殆ど全部のソキイはローマの市

民權を得たり。

4 貴族黨と平民黨との軋轢

イ、スルラとマリウス　スルラは貴族黨の首領にして、マリウスは平民黨の首領なり。二人の勢力は常に伍角にして、其間常に競爭激烈なりしが、恰も小アジアのポントス王ミトラダテスローマの内亂に乘じ、小アジアに於けるローマの領地を占領したり。之が征討軍の司令官につき、貴族黨と平民黨との間に大なる競爭を惹起し、遂に貴族黨勝を制し、首領スルラは東征して、ミトラダテスを降服せしめたり。

是に於てスルラの不在を機とし、アフリカに遁竄したる平民黨の首領マリウスは、歸りてスルラ黨を殺せしに、スルラ凱旋して、マリウス黨を屠りたり。中にはマリウスに些の關係なき



を知りながら、唯財産を沒收せむ爲めに殺せるもの少からず。

スルラ又貴族黨を利せんとして元老院の權限を擴張し、ホメキトリビユーターの決議は、元老院の許可を經ざれば一切効力なきものと定め、マリウス黨の土地を沒收して、自己の部下に分ちたり。平民黨是より全く政治上の權力を失ふ。

ロ、ポンペイウス　紀元前八一年スルラ死せるより、ポンペイウス其後を繼ぐ。ポンペイウスは貴族なるも、民望を得むとして專ら平民の歡心を求め、執政となるや、保民官の權限を回復し、ホメキア、トリビユーダの獨立權を與へ、スルラが高めたる元老院の權力を大に殺ぎたりしが之と同時にアフリカ及イスパニアに於けるマリウスの殘黨を討ち、又地中海上の海賊を平げたり。後ミトラダテス再叛せしかば、東征して之を亡ぼしシ

リア、パレスチナ等をも從へ、盛大なる凱旋式を以て迎えられローマに歸れり。

**八、ローマの凱旋式**　ローマの凱旋式は大將の武勳によりて種々の式あり。其待遇法は元老院之を決す。ローマの大將は凱旋式を受くるを以て最大の名譽とす。先づ將士歸來するや、市外に留まりて歡迎準備の完成するを待つ。準備整うや行列を作り音樂を奏し、俘虜及分捕品を携へ、市中に入る。大將は黃金を縫箔せる服をつけ、四頭立の馬車に乘り、右手に月桂樹の枝を左手に笏を持ち、月桂樹の冠を頂く。行列は官吏及市民の歡迎を受けて、凱旋門を入り、先づカピテル丘に登り、ユピテルの社に犧牲を捧げて禮拜し、然る後其所に凱旋の宴を開く。終つて萬衆の歡呼の内に各家に歸る也。



## 一七、ケーザル

**1 第一回三人政治**　マリウスの歿後平民黨の首領となりしは、ユリウス、ケーザルなり。ケーザルは万能の偉人にして勢力盛なりしかば、ポンペイウスは自ら貴族黨を辭して平民黨に加はり、ケーザルの娘ジユリアを娶りて血族同盟を形作り、更に當時の大富者クラススを同志に加へたり。此の三人が同盟して政治を行へるを、第一回三人政治といふ。ポンペイウスは武勳を以て勝り、ケーザルは才幹を有す。共に甲乙分ち難き大人物なり。クラススは人物としてはやゝ劣れども、無限の財産を有す。ケーザルとポンペイウスとは政治費に窮し居たる故クラススを同盟に加へたる也。此の外當時の人物はケトー。シセロありき。

**2 ガリア及ブリタニア征服**　ガリ人は白人種中のケルトの一支

族にして、ガリ人亦幾多の支族に分る。ケルト人は今日のフランス、イスパニア、スキツル、北部伊太利及イギリス等に住居せしが、其内にてガリアに居たるガリ人は最も進歩せる文明を有せり其宗教は自然崇拜にして、僧侶は宗教上の儀式のみならず、法律を制定し、裁判を行ひ、又醫藥の事をも司れり。其神を祭るや俘虜、奴隷、罪人を犧牲にしたり。而して彼等の男女關係は甚しき男尊女卑にして、夫は妻の生殺與奪の權を有し、夫は多數の妻を養ふ。

**3　ケーザルとポンペイウスとの爭權**　紀元前五四年、ケーザルの娘なるポンペイウスの妻ジユリア死し、両者の親屬關係絶へたるより、両雄並び立たず、激烈なる競爭を爲せり。ケーザル迫かに分捕品をガリアより取寄せ、ローマに種々の建築物を起して、



人民の娯樂場に供するや、ポムペイウスはローマに嘗てあらざりし大劇場を建て、ローマ市民に與ふ。ケーザル黨とポンペイウス黨との衝突、毎日市内の各所に起りたり。

當時ローマの代表的人物は、此二人を除きケトーあるのみ。ケトーは元老院の有力なる議員なりしが、ケーザルの武勳赫々たるを嫉み、元老院をあげてポンペイウスに味方し、ケーザルをして軍司令官の職を辭　　、且自らローマ市に來らざれば執政の候補者たる能はざらしめんとし、更にガリア總督の任期滿たざるに免職せしめんとせしより、ケーザル大に怒り、機先を制して反對黨を壓服せむものと、ルビコン河を渡りて不意にローマに侵入したり、元老院もポンペイウスも不意に攻められて如何ともする能はず、皆東に走る。ケーザル逃るを追ふてテツサリアのファルサルスに

破りたり。

**4** ケーザルの全盛　ケーザルは膨大なるローマ帝國が到底共和政治にて統治し得べからざるものとなし、其形式を存して實際は君主制となさんとせり。彼が紀元前四五年凱旋するや、其式の盛なる前古無比にして、市民皆彼の勳功をたゝへ仁德を稱せり。茲に於て國務の大權は皆彼一人に歸したり。彼は終身命令者となり保民總督官との職を兼ね、又最高法院長となり、更にインペラトル（インペラトルとは此所にては唯命令者の義なり。皇帝の意義を有するに至りしはオクタビアヌスの時よりなり）の稱號を得たり。而して彼は元老院を自己藥籠中のものとなさんと欲し、自ら元老院を任命するの權を握り、共和政治の根本たるホメキア、トリビユータを殆ど無用のものたらしめたり。彼は元老院の權利を



廣め、ローマ市以外のものにも元老院の議員たるを得せしめ、又ガリア、イスパニア地方にも完全なる市民權を與へ、其他殖民地を增設し、カルタゴ、コリントの舊市を回復する等形式に於ては一般人民の權利を尊重する如く粧ひ、內實ローマ大帝國の實權を掌握せり。

**5** ケーザルの施設　ケーザルはローマ市民が政治を論ずるを避けむとし、先づ國の裝飾をなさんとて土木を起し、カルタゴ、コリントの廢都を再興し、軍制を改革し。遊民に保護を與へて地方に移住せしめ。エジプトより曆を輸入して太陽曆を制定し。道路を布設し。橋を架設し。猶テビル河の治水工事及コリントの地峽を改掘せんと計畫せり。斯の如く彼は政治家として軍人として偉大なりしのみならず又文士として偉大也。ガリア戰役實記の如き

其文流暢典雅、歐洲古代史研究家の好史料たり。其他圖書館の創設。法典の編纂等後世を裨益したること夥し。

**6** 第二回三人政治　然るにケーザルは白晝公會堂に殺されたり當時元老院始め政府の局に當るものは、少しも殺害者を罰せんとせずして、却て之を可とし、之を知事に任命し、有名なるキケロの如きも之を辯護する有樣なりき。

是に於てケーザルの恩を受けたる人々は、ケーザルが共和政府に對する勳功を說き、國人の忘恩を非難し、遂にアントニウスはケーザルの甥オクタヴイアヌス及ケーザルの部下レピヴスと結托して第二回三人政治を作り、盛に政敵を殺し、兇徒をギリシアに追ひ、フイリッピに殺せり。キケロは「ケーザル死すとも專政死せず」と言ひたるより遂に殺さる。後レピヴス放逐され、アントニ



ウスとオクタヴイアヌスとは天下を二分して、前者は東、後者は西を保てり。

**7** アクチウムの戰爭　アントニウス、東方を傾してエジプトに居る。エジプト女王クレオパトラは女傑なり。アントニウスを說きて、ケーザルと女王との間に設けたるケーザリオンなる小兒を擁立して、之をケーザル直系の繼續者と宣言せしめたり。アントニウスは女王に瞞着されて、其妻オクタビアを離別す。オクタビアはオクタビアヌスの妹なり。之を聞て大に怒り、元老院に命じてアントニウスの官職を剝き、同時に宣戰を布告し、自ら大軍を率ひてアントニウス、クレオパトラの海軍なるヘヰニキア、エジプトの海軍を、ギリシアの西岸アクチウムに破り、アントニウス等皆自殺せり。是に於てエジプトを始め皆ローマの版圖に歸し、

天下又アククタヴアヌスの統治に屬せり。實に紀元前三〇年なり

## 一八、ローマの帝政時代

### 1 オクタヴアヌス

オクタヴアヌスはアウグスツス、ケーザルと稱し、共和政体の外形を存して、其實をとらんとし、有力なる官職は皆獨專して、事實上ローマの一大專制君主となれり。彼はローマ市民が濫りに政治を論議する風習を杜絶せしめんとて獵官者には官職を與へ、貧民には施米し、又演技場を設けて一般人民の娯樂場となし、兵士には分捕品を分配し、新占領地をも與へ、斯くして彼は人心を收攬せり。故にローマ市民はアウグスツスの政治に滿足し、武人は彼の武に服し、文人は彼の德を謳歌せり。當時ローマの領土は、西は太西洋より、東はエウフラト河に及び北はゲルマニ人、スラブ人の住むあたりより、南はアフリ



アラビアの沙漠に達し、風俗言語人種を異にする幾多の民族を含めり。故にアウグスツスは此以上擴張するの不得策なるを考へ、各地に蠻民の防禦柵を作り、唯現狀を堅固に維持せんとせり。キリストの誕生は實に彼の治世中(紀元前四年)なりとす。

### 2 フラウイウス

アウグスツス歿後、暴君相次いで起り、國内大に亂る。遂にシリアよりウエスパシアヌス出でゝ内亂を平定し帝位につく、實に六九年なり。其子チツス民望ありしも、三代目の帝にいたり位を失ふ。以上三帝をフライウイウス王統といふ。此間に起れる重なる出來事は、第一、ユダヤの滅亡なり。チツスはユダヤ人がエルサレムに朋黨を作り、相爭へるを奇貨乘ずべしとなし一舉して之を亡ぼし、ユダヤ人を奴隷に賣れり。之れ七〇年なり。之れよりユダヤ人は又國を爲すを得ず全く四方に離散せ

り。第二、ブリタニアの平定なり。第三ベスビアスの破裂なり。七九年チツス帝の時、ベスビアスの噴火山破裂して、ドナル河の邊なりしポンペイ及ヘルカルドネアムの二市は全く埋沒されたり此二市は從來其場所不明なりしが、一七一三年に至り偶然發見せられ、今や大部分は全く發掘され、古代ローマ史研究者の爲め史料を供給すること豐富なり。

**3**

賢帝五人と愚帝二十四人　九六年より一八〇年迄に帝位に就きしもの五人あり。皆名君なり。就中ツラヤヌス尤も聞ゆ。彼はアウグスツス帝以來ドナウ、エウフラトの両河をローマの邊境となすの主義をすて、自ら遠征して領土の擴張をなせり。彼は斯く武人として成功せるのみならず又内治の改良を企て行政司法の各方面に改良せるところ少からず。元老院の權力を再興し、土木を



起して、道路、橋梁を築き、又市内に大なる市場を作れり。彼は又文教上にも注意を怠らず。學校を建て、孤兒院を設け、大圖書館を起し、其他文藝の奬勵等彼の効蹟大なり。是に於て國民之を德とし、彼の戰捷紀念碑を市場に建つるに至る。其他ハドリアヌス、アントニヌス、ピウス、マルクスアウレリウスの四帝是なり中に就きマルクス帝尤も顯はる。帝は慈悲の心深く、貧民の租稅に苦しむを見て悉く之を免し、又孤兒院を起して孤兒を收容したるものなり。彼はストア派の哲學者にして、自ら持すること最勤儉に、屢俘虜兵の將としてローマの國境に出陣し、東の方パルデアと戰ひ、北の方ドナ河邊のゲルマニ人と戰ひ、殆ど其一生を戰場に送れりと云ふ。マルクス以後、紀元一九二年より二八四年に至る九二年間、帝位につきしもの二十五人あり。在位十年以上

のもの僅に二人ありしのみ。十人は兵士に殺されたり。此間兵士の權力強くして、帝王は唯虚器を擁するのみ。故に史家は「兵士皇帝」といふ。

## 一九、東西ローマの分離

### 1 デオクリチアヌス

紀元二八四年チオクリチアヌス、ローマ皇帝の位につく。彼はアグウスタス以來一人の皇帝によりて統一せられたるローマの今や維持すべからざるをさとり、帝國を四分して、之に二人のアウグスタス及ケーザルを置き、自ら東方のアウグスタスとなりてニコメデアに都し、西方には一人のアウグスタスに任しミトラム、ミロナに居らしめ、二人のケーザルはオウグスタスの下に帝國の一地方を統治せしめたり。然れ共總括した る大權はデオクリチアヌスの握る所とす。彼の治世中重なる出來



事は、キリスト教を迫害せる事なり。是れローマの舊習慣を墨守するを以て尤も肝要なる政策と信じたるに依る。紀元三〇五年彼死するや、アウグスタスとケーザルとの間に爭を生じ、國内大に亂れ、一時は十六人の皇帝希望者ありしも、紀元三二三年シーザルの子コンスタンチヌス國内を一統したり。

### 2 コンスタンチヌス

帝の在位中大なる出來事三あり。第一は全國を統一して、之を(一)東方、(二)イリリア、(三)イタリア、(四)ガリアの四大縣となし、之を十三の郡に分ち、更に百十七の村に分ちて、全くデオクリチアヌスの制度を廢せり。第二は三二三年キリスト教をローマの國教とせり。第三はローマの首都を、ローマ又はニコメデアより移して、ビザンチオンに置けり。然してビザンチオンをコンスタンチノプルと改稱す。而して遷都の理

由とする所は、(一)キリスト教を國教とせることが、ローマ市民の嫌厭する處となれるためなり、(二)ローマの領地は次第に擴張して古代文明の發源地たる中央アジア、エジプト等に廣められしかば、蠻民の巣窟たるガリア、イスパニア、ブリタニア等に近きローマ市をさけ、諸事殷富なる地方を選びしなり。

**3** ゲルマニア人　此時に當りローマの北方、ガリアの東方に住めるゲルマニスなる蠻民あり。元來狩獵の外何事をも爲さゞる極めて漂浪的なる種族なりしが、ローマ帝國の末路に近くや、久しき太平になれ、人皆脆弱となりて兵士たるを欲せざりしかば、適當なる兵士たるゲルマニア人種を傭ひて、ローマの國境を守らしむるに至れり。即ち曩に敬遠せられし蠻民は、今やローマ人に利用さるゝに至り。多少の土地さへ與へて、戰時兵士を供給する義



務を負はしむ。之をヘデラーテイといふ。

**4** 蠻族の消長　ゴートとは蠻族集合の一にして、分つて東ゴート、西ゴートの二となす。東ゴートは黑海とドン河との間より起り。西ゴートは西の方ドナウ河の北方に住へり。而してバレアス帝の時、匈奴に迫られて、西ゴートは一時ドナウ河の南岸に移る。

ワンダルとは元ドイツの北方に住める種族なりしが、ゲルマニア諸蠻族の大移轉と共に次第に西方に移り、一時イスパニアに居たり。然るに四二九年に至り、其王ガイセリイチの下に、アツテカに渡り、此所にローマの領地を占領して、新なる國を建てたり。彼等は頗る武略に富み、大に海軍を起して地中海諸島を占領し、四五五年西ローマに内訌起るや、進入して二週日の間にローマが

有せる一切の財寶を掠奪す。然るにガイセリッチ王の死後、其勢力次第に衰へて、遂に五三四年東ローマ皇帝ヂアスチニアヌスの亡ぼすところとなれり。

**5 テオドシウス**　テオドシウスは始めローマ東方領地の大將なりしが、コンスタンチヌス大帝がゴート人に殺さるゝや、擧げられて帝位に就き、再全國を統一せり。帝巧に蠻族を懷柔し、彼等の勢力を分割して之を弱らしめんとし、ゴート人四万人をローマ軍隊に編入し、其餘の者は小アジア、トラキア等に分置したり。帝は紀元三九五年ローマ帝國を東西二國に分ちて其子に與ふ。

**6 蠻族の侵入**　テオドシウス大帝死して、儲君猶幼かりしかば大臣其權を握りて相爭ひ内訌たえざりしかば、西ゴートの王アラリッヒ虛に乘じて、イタリアに侵入せり。西ローマにては此の侵



入を防がむとして、國境に配置せる兵士を悉く召集せるより、ローマ北方の蠻族は、西ゴートに倣ひ、兵備不完全なる西方より侵入せり。此ゲルマニア族の活動につれ、歐洲の中原を蹂躙せるは黄色人種なるフン匈奴人なり。彼等は中央アジアの方面より次第に歐洲に侵入せる種族にして、矮身なれども巧に馬を騎し、弓を射、攻城野戰に巧にして到る處、皆彼等に征服せられざるなし。其アッテラ王の頃には、彼等の大帝國はボルチック海、ボルガ河ドナウ河を以て包む大陸、殆ど歐洲の東の半分を有するに至れり王はパンノニアに極めて粗末なる宮殿を作りて住めり。アッテラ王はコンスタンチノープルを陷れむとせしも、地勢上攻擊するに困難なりし故、遂に西ヨーロッパに侵入し、次第に進みてガリアに入れり。是に於てガリアに在りし蠻族即ち西ゴート、サクセス

フランク、ブルクレドは、ローマと同盟して、アテラの軍にあたり現今フランス、シャロン邊のカタラニウスの野に破る。アッテラ即ち方向を轉じイタリアに侵入し、北部イタリアを掠奪せり。然るにアッテラの軍中惡疫流行せしかば、進行を繼續する能はず。アッテラは四五三年ドナウ河の邊に死せり。彼の死後フン族の勢次第に衰えて、遂に全く其跡を歐洲に絕てり。

**7　西ローマの滅亡**　五世紀の中葉に至り、西ローマ帝國に於けるテオドシウスの血統絕へたるより、帝位の相續は之より亂れ、四七六年ゲルマニア族の一支族ハルリッチ（ローマの傭兵）の大將オドワケル、ローマの元老院を威嚇して、西ローマ皇帝を廢さしめ、東ローマ皇帝の許可を受けて、パトリテースなる名稱の下にイタリア全土を統治することゝなれり。是に於て西ローマ帝國遂



に亡ぶ。時に四七六年なり。

## 二〇、ペルシア

**1　ペルシアとトラヤーヌス帝**　ペルシア人は黃色人種に屬する遊民にして、初め中央アジアに彷ひ居たるが、紀元前二五〇年頃酋長アンクの下に山賊となり、イラン高原の北の方より、當時のシリア國に侵入し、遂に東北方の大部分を殺ぎ獨立の一王國を作り、之より次第に西方に領土を擴張して、都をクテシホルに建て盛にギリシアの文明を輸入せり。

ローマの大將ポンペイウスがシリア、小アジア、地方をローマの領土とするや、ローマはペルシアと境を接するに至り、毎年爭ひたゆる時なかりき。紀元前五四年ローマの將クラスサスはペルシア遠征を企てたるも、大敗して戰死す。斯てペルシア征伐は尤も

困難なるものなりしが、帝政時代にトラヤヌス帝自ら遠征して、之を亡ぼし、西ローマに加え、アルメニア、アッシリア、メソポタミアの三村に分ちたり。即ちハドリアスに至りペルシア人と戰ふは、ローマ帝國の得策にあらずとなし、再び此プロビンスをすてしが、之よりペルシア人のローマ國境に出沒すること益々絶えず爭鬪毫も熄む時なかりき。

**2** サッサンデー王統　サイラスダリウスの如き英雄、ラタレ、ソロータルの如き大宗教家を出したるペルシアも、紀元前三三一年アレキサンドル大王の亡ぼすところとなり、以來全くギリシア民族に屈服し、其後復ペルシアを再興する迄五百年間、歷史上其名を顯はさゞりしも、紀元二二六年に至りアルデシラなる英雄起り、腐敗せる貴族を排斥して、新ペルシアを建てたり。之をサッ



サンデー王統といふ。爾來ローマの東境競ひてローマ歷代の帝王と絶えず兵を交へたり。而かも一國の運命を決すべき大戰爭なかりしかば、ローマ帝國はゲルマニア人に對する防禦力を割きて、東方領土の保護を爲さゞるべからざるに至り、遂に西ローマ帝國の沒滅を見るに至る。

## 三、ローマの文明

**1** 學術

イ、歷史　ローマの歷史家にして有名なるもの及其著書の著名なるものを擧ぐれば左の如し。

(一)ケーザル　武人政治家として著名なりしケーザルは、又歷史家として秀逸の才あり。其著「ガリア戰役評論」は、ガリア戰爭記にして、紀元前五二年迄彼が關係せるガリア戰爭の經過を

示す。紀元前五一年彼自ら筆を執りて之を認め、時のローマ政府に提出せり。全体流暢なるラテン文にて、記事頗る明瞭なりといはる。其外「内亂の記錄」あり。(二)リビアス　其著書はアンネルあり。太古より紀元前九年までの年代記なり。元來百四十二ありしが、現存するもの僅に三十五卷なり。(三)サラステイアス　著書は「カテリナ陰謀記」なり(四)タシタス　著書は「ケルマニア」及「アグリコラの傳」なり(五)サクトニアス　著書は「十二人のケーザル」なり。オウガスタス以來十二人のケーザルの評傳なり。

**ロ、哲學**　哲學もギリシアの摸倣にして、別に創見せるところなし。ギリシア哲學の内、ローマに入りて尤も發達せるは、ストア學派の哲學なり。ストアとはアテネに在る學校の名にして



ゼノンの主張せる克己主義哲學をストア哲學といふ。總て外物の束縛を離れて、克己寡慾の生活を理想とし、學問は實驗を主とせり。又四民同胞説を唱へ、奴隷虐待を禁ぜんとする説もストア哲學のローマに入れるは紀元前二世紀頃なり。其主なる哲學者は左の如し。

(一)パネチアス　パネチアスはフーデス島の人ストア哲學をローマに輸入せる人也。當時保守派の首領、カトーは、熱心之を排斥したるも、外國新思想の輸入は底止する處なく、有力なる哲學者を輩出せり。(二)セネカ　セネカの著書は、倫理道德に關する論文多く、新見少からず。(三)エピイクテイアス　エピイクテイアスは元小アジアのヒレヂアの人にして、奴隷に賣られたる事あり。解放せられたる後、ストア哲學を講せり。後ド

メテアヌス帝は彼の説を治安妨害として放逐せり。(四　マルクス、アウレリユース。著書はメヂタシヨンなり。

八、文學　アウガスス帝は其臣マセナスと共に文學者を保護し文藝を奬勵したり。其主なる作家は左の如し。

(一)ビレヂイリアス　著書はエイネイド也。(二)ハロチツク　アウガスス帝に寵愛されし田園詩人也。(三)オーシイディアス　詩集あり。(四)シセロ　シセロは多方面の秀才也。政治家たり文學者たり、法律家たり、雄辯家、哲學者たりき。然れども政治家として主義節操なく、詩人、哲學者として大思想を有さず、唯シセロに取るべきは文章の妙なり。彼が文は近世ラテン文の祖と稱さる。

二、法律學　ローマの法律の基礎は紀元前五世紀頃公にせられし十二銅表なり。之自身は幼稚なるものなれども、是迄の法律の發達を知るに便利なり。シセロは法律學の發達に貢獻する所大なり。アリウス帝益々進歩し、紀元二三世紀頃尤も盛なりき所謂五大家を出せる此時なり。其後復彼等に比肩すべきもの出でざりしも、法律學の進歩は駸々として已まず遂にヂアスチニアン法典を編成するに至れり。



## 2

社會制度

イ、ローマの奴隷制度　ローマの奴隷の多數は、ローマ人に征服せられし戰敗國の人民なり。奴隷は何等の權利を有さず、即ち奴隷は人間にあらずして財産なり。さればバアローは奴隷は生きたる農具なりといへり。彼等は晝は鎖につながれて働き、夜は穴庫に入れられ、粗衣粗食に生活せざるべからず。彼等の

仕事は雜多也。或は料理人、或は音樂師、俳優等より醫師、教師。農工商人。牧畜、園丁。給仕等あらゆる職務に從ふ。凡そローマ人は手足を働かすを以て人間の耻辱なりと信ぜる故、一切を奴隷に任せ、自己は何事をも爲さゞるなり。奴隷の賣買は奴隷商人が彼等を假小屋に陳列して、之に生國、年齢、學力、體力等を記せる札をかけ、希望者をして撰擇購入せしむ。但ギリシアの學問ある奴隷は、特に別室に置きて特別の客にのみ賣る。代價は五六圓より一二万圓迄なり。奴隷に對する制度は、昔は主人が生殺與奪の權を有せしが、ストア哲學やヤソ教がローマに入りたるより、其博愛主義は次第に奴隷制度を改善せしめたり。即ち紀元前八十二年、他人所有の奴隷を殺す時は殺人罪を以て論ず。紀元前六十一年、主人が野獸と鬪はしめむとせ



ば、官許を受くべし。紀元前四十一年、病奴隷を殺すを禁ず。ユーリピアスは人間は平等なり。故に奴隷制度は自然に反すと言へり。

アントニユース帝は、主人の虐待に堪えず神殿に遁竄せる奴隷は、再び主人に戻さず、賣買するを許す。斯くして奴隷の地位は次第に高まり、十二三世紀頃には全く其の制度を絶つに至れり。

**ロ、ギリシアの家庭**　ギリシアの小兒は父の絶對權に服從し個人の權利なし。殊に女子は結婚に就ては父の隨意に定められ、嫁しては夫の絶對權に服せしめらる。ギリシア人は女子を卑しむ。されどアテネとスパルタとは其思想習慣に差異あり。アテネにては、未婚の女子は祭禮以外外出を許されず。許嫁の男以

外の男と談話を禁ぜられ、結婚後は夫に嚴重に監督さる。夫死するも遺言なければ再婚するを得ず。但此等の女子以外に一種の醜業婦ありて、交際社會を賑はせり。ペリクレスの友人アスパシアは有名なる醜業婦なり。

スパルタにては、未婚婦人も既婚婦人も、男子と公然遊戯するを許さる。之れ男女同權を認めたるにあらずして、女子の身體を健康にして、壯健なる男子を生ましめむ爲め也。結婚式に就ても、二國の習慣は大に異なる。スパルタにては、質素にて、女子は仕度を要せず、夫たるべき男は、女を盗むが如く連れ行き、窃に結婚す。但し早婚を禁ず(男三十以上女二十以上)

アテネにては、其式頗る盛なり。結婚の前夜新郎新婦の両家にては、憤怒等の惡性の表象たる膽を神に犧牲に捧ぐ。當日夕方



新婦は美衣をつけ　二輛車に乘りて輿入し、新郎の宅につくや車を遣り、再び乘らざるを示す。式は先づ新夫の氏神を祭り、次に新婦は新郎の頭上に無果花其他の果物をまく、之れ家の繁昌を示すもの也。終つて親類を集め大宴會を開く。

## 八、ローマの家庭

ローマにては、家長即ち家族の長は其家族の生命財產に對し家長權を有す。此權利は昔は絶對的なりしがキリスト教及ストア哲學の輸入により次第に融和されたり。其大略を言へば、ハドリアヌス帝は不孝の子を殺したる父を追放の刑に處し、コンスタンチヌス帝は子を殺したる父を親殺と同罪とし、トラヤヌス帝は子が父に虐待されたる時は父の元を離るゝを許したり又子を賣買すること及び質入することは、古代は法律を以て許されたるが、十二銅表にて之を禁じ、父若し三

度其子を賣り又は質入する時は三度目に其兒は解放すと定め、ヂオクリチヌス帝は子の賣買及質入を嚴禁し、コンスタンチヌス帝は極貧者に限り、新に生れたる子の賣買質入を許したるがヂアスチニアヌス帝に至り子の賣買質入を爲すものを罰することになれり。子の財産に就ては、父は絶對的權力を有せしが、アウガスタス帝は子が兵役によりて得たる財産は子の所有とし次いですべて公職より得たる財産の所有權を認めたり。

## 二、遊藝

（一）演劇　ローマ人は悲劇を好まず、喜劇、默劇、道化茶番等を好む。そは劇場が大なるため音聲の屆かざると觀客にラテン語を解せざるもの多かりしとによる。俳優は名人上手多く、收入六七万圓を有せるもの尠からず。（二）鬪士　鬪士はローマ人特有の遊戲なり。此遊戲の起原は、古代エトロリア



人が死者を葬る時其墓地に於て俘虜又は人殺を殺す習慣ありしが、後には俘虜を鬪はしめたり。之れ俘虜の血によりて死人の魂が慰めらるると信ぜるに依る。此習慣紀元前三世紀頃ローマに入り、遂に公の場所に於て眞劍勝負を行はしめ、之を見て、樂しめるものなり。而して初めは奴隷、俘虜非人等なりしが、後にはローマ市民も出場するに至りたるのみならずドイツ人、シラキア人、アフリカ人等も加はりたり。歷代の皇帝も人民の歡心を得むとして盛に擧行せり。鬪士の學校はドミチアヌス帝の建てたる四大學校の外、各都市は其設あらざるはなし。鬪士の數も次第に增加し、ケイザルの時代には一時に三百二十人を戰はせ、アウグスタス帝は其一生中に一万人を戰はせ、トラヤーヌス帝は四ヶ月に一万人を戰はせたりといふ。（三）獸鬪　動物

と動物と、又人間と動物と鬪はすることは、紀元前百八十六年以來行はる。動物は熊、狼、獅子、鰐魚、豹、虎、象等にして戰はしめんとする時は、先づ之を饑しめ又は怒らしめたり。ホンピイアスは獅子五六百象其他の野獸四百二十戰はしめ、アウグスタスは三十六疋の鰐魚を鬪はしめ、コリイギウラ帝は四百疋の熊とアフリカの野獸とを同時に戰はしめたり。

## 3

### イ、ユダヤ教

キリスト教

ユダヤ國は紀元前五百八十六年バビロニアに亡ぼされ、バビロンに移さる。此の事件を彼等ユダヤ人は唯一の神ヱホバに仕へずして他國の神をも拜せるをヱホバの罰せるところとなし、許されてパレスティンに歸るや、從來の形式を廢して新に儀式を定め、僧侶をして人民の行爲を裁判せしめたり



彼等は神を祀る器具を神聖とし、神殿を不可侵地として祭司の外は出入を禁じ、異教徒の供物を却け、又異教徒と共に飲食せず讃美歌を歌はず等、形式を定むるに忙しく、虔神の精神を失ふに至れり。政治上に於ても亦ユダヤは頗る困窮の狀にあり。屢ローマに侵入されて、人民困難を極め何人もヱホバが近き將來に於てメシアを下し、ユダヤの國勢を回復し、人民を救濟すべしと信ぜざるはなかりき

### ロ、キリスト傳

キリストは紀元前四年ジユレサレムに生る。身は極めて卑賤なりしが、同胞の信仰の益々下るを見て之を救濟せむとし、苦行數年、遂に大悟す、ユダヤ人の理想とする天國は決して遠き將來にあるものにあらずして近き吾人の足下にあり。ヱホバ神は愛の神なり。怖しき神にあらず。彼は自己を

信じ自己に信頼するものは何人をも憐む。神と彼とは父と子の如し。故に徒らに犧牲を供するを要さず。唯日常己が道を誤たざれば、万能なる神の力は吾人の心に現れて、幸福なる生活をなすを得るものなりと觀念す。乃ちキリストは此信念を近親に説きしに、信用せられしかば、益々布教に從事せしより、遂に上流社會の嫌厭を受け、彼が在來の儀式を攻擊するは、神を誹毀するもの、邪道を以て人心を惑はすものとなし、遂にローマの地方官はキリストが救世主と自稱するは神たらむとするものなりとて反逆罪に問ひ磔刑に處したるものなり。

**八、キリスト教**　キリストが其教を宣傳せんとするや、般の人類を目的とせしにあらず、唯彼が鄕國の同胞の爲みなりしが、彼の弟子は彼が十字架上の磔死は人類の爲めに償ひ



となれるものなりとなし、益々宣教せしより、遂にキリスト教は世界的のものとなれり。弟子ペテロはパレスタイン地方を、ポールはマケドニア、ギリシア等を宣教したり。ポールは其第四回宣教旅行に於て遂にローマに入りたるが、時の皇帝ネロはローマ大火の責を、キリスト教徒に歸し、紀元六十七年ポールを斬罪に處せり。間もなくペテロもネロ帝に殺され、其他のキリスト教徒も非常に迫害せられたり。彼等教徒はネロ帝を始めとして十回程の迫害を受けたり。トラヤーヌス帝は百七年の僧正を圓形大劇場にて猛に食はせ、マルクス帝は百六十七年八十六歳の老僧正を火刑に處せる等著名也。すべてローマにては天變地異ある毎に其罪をキリスト教徒に科し、其改宗を迫り、應せざる時、火刑、磔刑等の極刑に處すこと、婦人小兒にも及ぶ

二、キリスト教の迫害　ローマは政略上より信仰の自由を認めたるより、ギリシア、カルデア、ペルシア、エジプト等の宗教皆ローマに入り、共和政の末年には此等の神は皆ローマ人に崇拜せられたり。然るにキリスト教獨り何故に迫害せられしぞ。其理由は、キリスト教は從來の多神教と異り、唯一の神エホバをのみ拜し、ローマの儀式や習慣を排斥せるによる也、斯の如きはローマの歴史、傳說等を無視するものにして、其國体と相容れざる也。故に歴代の天子はキリスト教はローマの國体と両立すべからずとなし、之を迫害せり。之れ善良なる皇帝程烈しく迫害せる所以なり。

政府の迫害益々加はるにつれ、教徒の信仰心いよ〳〵堅固となり、傳播も熱烈となりしかば、遂に三百十三年コンスタンチアヌス帝はキリスト教をローマの國教とすることを許せり。實に教祖キリストが宣教してより三百年を經て漸く自由となれるものなり。



ホ、ニケーア宗教會議　紀元四世紀、神とキリストとの關係につき、一大議論を生せり。當時神學研究の中心は、アレキサンドリアにして、其地の僧アリウスはキリストは神の子なれば神より劣等なるものとなし、アサヌシアスは神とキリストは同一の神格を有するものとせり。此論爭は三百二十五年小アジアのニケーアに會議を開きて決することとなり、遂にアリウスの敗となり、彼は異論として破門せられたり。之れより宗論盛に行はれ、ローマ人のみならず、ゲルマニアの諸蠻族にも及び、殊にアリウス派のキリスト教はバンタル、ゴート等の間に行はれ

バイブルは各國の語に譯するゝに至れり。

斯くキリスト教が行はるゝや其教徒の他宗教徒を排斥すること甚しく、アレキサンドリアにてはキリスト教徒が一揆を起して其土地の多神教徒の殿堂を壞ち、又テオドシウス帝はすべて異端の儀式を用ゐたるものを極刑に處せり。デアスチニアヌス帝は五百二十九年アテネの哲學學校を閉校せしめ、濫りに哲學上よりキリスト教の教義を論ずるを禁ぜり。啻に異教徒のみならず同教徒のアリウス派また大に虐待を受けたるものなり。



# 第二編　中古史

## 第一章　列國の創始

### 一、ゲルマニ民族の遷徙

#### 五大族

ローマの全盛既に過ぎ去りて、歐洲は漸次列國の建設を見んとせり。而して其祖先たる民族は五大族の白人種是なり即ち第一グリーキ、第二ラデン、第三ケルチ、第四ゲルマニ、第五スラブをいふ。

イ、ローマ人　グリーキ及びラデン族なるローマ人は歐洲の南部地方に住居して既に早く開化したるものなり。

ロ、ケルチ族　大凡そ西北部に住みしが、未だ蠻民狀態を免れず

八、ゲルマニ族　即ちゼルマン種と稱し、チュートン人種といひ、中部及び西北部を占領せる一大民族にして、ゴート、フランク、アンゲル、サクス、アラマン、ワンダル等數十の種族に分れ、性質最慓悍にして戰鬪を好み、專ら農牧を業として自由民主政體を有し、遂に現今の文明を致せり。

二、スラブ族　東部に棲息して、中央白人種と交渉せず主にアジア洲と交渉深き、ロシア人是に屬す。

2　ゲルマニの大遷徙　紀元三七五年、蒙古種の一派にして出處不詳なるフン人が他の蒙古人種に迫られ、遂にゲルマニの地に逃入したれば、ゲルマニ種族茲に大遷徙を起したるものなり。初めフンは黑海北岸の東ゴートに入り同時に西ゴートを侵せしかば、西ゴートは東ローマに請ひ、其領域なるドナウ河の南岸に移住せり。



二、ゲルマニ種族の建國と西ローマの滅亡

1　西ゴートの建國　西ゴートの東ローマ領域に移住するや、間もなくローマの官吏と爭を生じ、屢々ローマの軍を破る。是に於て東ローマは西ゴートを敎唆して遂に西ローマに侵入せしむ。紀元四〇〇年西ゴート王アラリックイタリアに進擊せしが、却て西ローマの爲めに破らる、然れども西ローマは之が爲めにガリアの警備兵を召還せしかば、ゲルマニ族は其虛に乘じてフランク人先づガリアに入り、アラマンはゼルマンに入り、ワンダルは遠くイスパニアに入り、アンゲルとサクスとはグレートブリテンに據りて現今のイングランドの基を爲せり。而して西ゴートは遂にローマを侵しゝが、西ローマ皇帝勢屈してアラリックと和し、之をし

てイスパニアを鎮ぜしめしかば、ワンダルはアフリカに移りて茲にワンダル王國を建設す。時に紀元四二九年。

**2 フン族の盛衰**　而して當時フンは既に東西ゴートの故地を征服して、版圖はバルト海より南はドナウ河に達し、東ローマに迫りて歳貢を致せしめ、勢に乘じてイタリアを侵せしが、ローマの基督教僧正の仲裁によりて和を講ず。然れども其後漸く衰へて今のホンガリアに局促せり。

**3 西ローマの滅亡**　西ローマは其後政權は全く西ゴート傭兵の手に歸せしかば、傭兵の將オドワケル勢に乘じて西ローマ帝を廢し、自ら立ちてイタリア王と稱せり。西ローマは紀元前三九〇年より是に至るまで八六六年。

**4 フランク王國**　此時に當りフンは全く衰へて東ゴートは遂に西侵し、以てオドワケルを降し、其國を占領したるが、フランク一部の王クロドウィヒは同族を一統してアランを滅し、西ゴート王國を蠶食して南ガリアを取り、以てパリーに都しフランク王國を建設せり。



**5 ローマ法王**　西ローマ帝の廢せられしより、基督教の僧正は隨一の貴人としてゲルマニ族に尊崇せられ、遂に後年のローマ法王を爲せり。

## 三、東ローマとペルシア

**1 東ローマ**　東ローマ帝國は西ローマの滅亡後凡そ一千年間の命脈を保ちしが、其間内には政教混同の弊害相續き、外にはペルシアとの干戈を交ふること多年國勢大に疲弊す。

**2 ペルシア**　ペルシア亦東ローマと境域を接するのみならず、

両國の文化開明の性質全く相異なり、加ふるに各々大統一を理想せる大國なれば、自然其衝突を免れず、却て兩々相疲弊して漁夫の利を他邦に占めらるゝに至りぬ。

**3** ユスチニアヌス帝　紀元五二七年東ローマにユスチニアヌス帝出づ。帝は東ローマ絶代の賢君にして、位に登りしより善く内政を修め、政教の宿弊を一掃して有名なるローマ法典の大法典を編纂せしめ、現今法律の淵源を成したるのみならず、學藝美術農工業を奬勵し、支那より蠶卵桑種を移して養蠶の業を興し、埃及を征してワンダル王國を亡ぼし、東ゴート王國を平げてイタリアの地を復し、更にイスパニアの南部を取りて處々に大建築を起す等其功業蓋し大なるものあり き。

**4** ホスロー　時にペルシア王ホスロー一世亦一代の明主なり。



深く意を學術の奬勵と内政の整理に用ゐしが、東ローマの日に盛んなるを見て心常に安からず、屢々兵を起してローマを攻むるに至りき。

**5** エフタル　時にペルシアの東にエフタル嚈噠あり。常にペルシアを侵して之を苦しむ。エフタルは東洋史に於ける月氏の後にして威を中央亞細亞に振ひ、南は印度より西北はアラル海に及ぶ大版圖を領し、常にペルシアを苦しめしかば、ホスロー一世遂に苦肉の策を講じ、之と和して軍を東ローマに進め、以て先づ東ローマを亡ぼさんとせり。

**6** ベリサリウス　此時東ローマはユスチニアヌス帝其名將ベリサリウスに防禦軍を督せしめ、以て大にペルシア軍を要擊せしかば、ペルシア軍多く利あらず、遂に紀元五四〇年兩國和議を講じ

だり。

7 突厥　ペルシア王東ローマと和を講じてより、一意エフタルを圖りしが、時に東洋史の突厥漸く強大を致し、南はパミル高原より西はカスピ海に及び、頻りにエフタルを侵略せしかば、ホスロー一世之を好機として突厥に結び、エフタルを夾擊して其西境を略し、後遂にエフタル突厥に征服し終らる。

8 兩國の決戰　紀元五九一年ホスロー二世ペルシア王として立つや、東ローマの内亂に乘じ大舉して侵入し、進みてコンスタンチノプルを圍みしが、東ローマ帝ヘラクリオス帝之を破り追擊してペルシアに入り、其首府クテシフオンに迫り以て和を結び、互に其侵地を還したり。この役や兩國存亡を賭したる一大決戰にして互に疲弊したること甚しく、其極は恐らく衰弱を來しまた起つ



を得ざるに至りしかば、遂にサラセン興雄飛の好機を與へたり。

## 四、サラセン

1 サラセンの故地　アラビア人にして遊牧を業とし、間々隊商をなし諸國に行商する者ありしが、一般に偶像敎を奉ずる蠻民たり。

2 ムハメッド　紀元五七一年アラビアのメッカにムハメッド生る。自ら上帝の聖使と稱して四十歳の時、ユダヤ、キリスト兩敎を參酌して回敎を開く。其敎理簡單にして最アラビア人の慓悍なる性質に投合しけれども、一時メッカ市民の迫害を受け、纔かに身を以てメヂナに出奔せり。時に紀元六二二年にして回敎敎徒の紀元元年なりとす。ムハメッドは此地に於て人民の歸依を受け、

終に兵を擧げて先づメッカを襲ひ取り、漸次アラビアの諸部落を統し、政教の主となりてサラセン帝國の基を開き、六三二年病に歿せり。東洋史に曰ふ太食國是なり。

**3** サラセンの膨脹　ムハメッドの繼承者は代々ハリフアと稱し政教兩權を握り、漸次四方の侵略に從へり。而して彼等の四方に臨むや、コーラン(回教聖書)朝貢、劒戟の三者に依り以てシリア埃及を略して領土を擴大せり。

**4** ペルシア滅亡　斯くて紀元六四一年大にペルシアと戰ひて其領土の大半を奪ふ。時にペルシアは援を唐に乞ひしも時の皇帝太宗之に應せざりしかば、ペルシア遂に併呑し終られぬ。

**5** 東西分立　其後ハリフア繼承の內亂ありしを以て暫く外征を停止せしが、オンマヤ朝の祖ムアウイア內亂を鎭めて之を統一し



都をダマスクに遷せり。爾後サラセン國は東は中央亞細亞を平定し、西はアフリカの北岸にまで併呑し及びイスパニアに侵入して紀元七一一年には西ゴート王國を滅し、七三二年にはフランクを侵せしも却て大に擊退せられぬ。既にして國內又亂れ、紀元七五五年アブル、アッバス自立してアッバス朝を創め、都をバグダートに遷すや、オンマヤ朝の遺類アブデルラーマン、イスパニアに走り、自立してハリフアとなり、コルドバに都を奠め、茲に東西分立を見るに至れり。時に紀元七五五年。

**6** サラセンの文化　サラセン東西に分れしと雖も、共に學術技藝を奬勵せしかば、其文化は燦然として光彩を放ち當時の列國文化に勝ること甚しかりき。加之各種の產業大に發達し、製造品精巧を極め、海上の航運また支那傳來の羅針盤を利用し、東は印度

南洋諸島、西はジブラルタルを過ぎて大西洋沿岸に出沒し、南はアフリカのモサンビグ地方に往來し、陸上は固有の隊商法に依りバグダードを中心として東西各地に通商したるものなり。是に於てかサラセンの國富は日に增殖し、兩ハリファ朝の華奢は實に後世人目を眩せしむるものありき。

然れども、回教の性質たる人心を威嚇して歸依せしめたると、且つ其領土餘りに廣大にして幾多異人種の統一に困難を來し、終に分裂衰頽の悲運を招くに至りしこそ是非なけれ。

## 第二章　列國の發達

### 五、ローマ法王と正教分裂

**1　ギリシヤ帝國**　東ローマは初め西ローマと分立以來漸次イタリア風を失ひ、專らギリシアの言語文化を收容せしかば、[illegible]



をギリシア帝國とも稱するに至れり。

**2　レオ三世帝**　而して東ローマ帝國はヘラクリオス帝の後衰勢大に衰へしが、紀元七一七年レオ三世立つや、先づサラセンを擊退してコンスタンチノプル府を重圍中に救ひ、諸制度を改革して帝國の面目を一新せり。時に基督教は偶像崇拜の弊大に起り、恰も多神教の禮拜堂たるが如き觀ありしかば、帝は七二六年命令を發して之を嚴禁せしに、端なくもローマ法王が强硬なる反對に遭遇せり。

**3　ローマ法王**　是より先、基督教信者は一般に平等主義を取り役僧を選擧して教會の事務を處理せしめつゝありしが、其四方に弘通すると共に、僧侶と信徒の間漸く懸隔を生じ、牧師は僧正に、僧正は大僧正に隷屬し、以て各地の僧侶を總管せり。然るにロー

マの大僧正には俊傑相次ぎて出で、グレゴリオ一世の如きは頻りに正教を弘め、之を直轄して宗教上の大權を握り、自ら兵を集めてローマを衛るに至りしかば、恰も半獨立國の體を具へ、世人遂に尊稱して法王といふに至れり。

**4 政教の權**　法王グレゴリオ二世に至り、偶像禁止令に遇ひたりしかば、極力之に反對し、ランゴバルトの後援を得て遂に自立し、ローマ領たりしイタリアの地に君臨す。是に於て法王政教二權を管するに至れり。

**5 正教の分裂**　既にして皇帝、法王相つぎて歿し、七四一年にはコンスタンチヌス五世、帝位に登るや、サラセンを破り、ブルガル以下のスラブ種諸族に勝ち、絶對に偶像崇拜の禁を厲行したりしが、時に法王治下のイタリアはランゴバルド人勢ひを得て



ローマを侵さんとしたりしかば、法王乃ちフランクの宮宰ピピンの助けを求め、以てランゴバルドを退け得たり。是に於てか法王は常にフランクと結托してギリシア皇帝と絶縁するに至りしかば、正教は遂にローマ教とギリシア教の二派に分れたり。

## 六、カロロ大帝の業

**1 フランク國**　紀元五一一年フランク國はフロドウイヒの死後其勢駸々として進み今のドイツの西南部及びフランスの大半其版圖に歸せしが王權漸く衰へて實權宮宰の手に落ちぬ。此時に當り宮宰ピピン遂にローマ法王の助を得て王位に登り、カロリンガ朝を創建するに至れり。時に紀元七五一年。

**2 カロロの大版圖**　七六八年、ピピン歿して子カロロ嗣ぐ。カロロは蓋世の英傑にして雄畧大度あり、イタリアに入りて、ラン

ゴバルドを平げ、東北はスラブより西南はイスパニアの一部を征略し、四十年間出征五十三回の多きに達し、其版圖は西歐一帶の地に及べり。是に於て法王はカロロに西ローマ皇帝の冠を授けたりしかば、ローマまた東西兩帝を生ず。時に八〇〇年。

**3 カロロの守成**　斯の如く外征に遑なかりしが、亦守成の名君にして政務を整へ、學術を興し、實業を奬勵し、宗教を保護したる治績等は燦然として武畧に劣らず。都をアーヘンに奠めて其大領土を數多の縣に分ち、縣には伯、邊境には侯を封じ之に軍役を負はしむると同時に各分治の義務を命じ、以て封建制を採用し、毎年一回五月には地方官以下僧俗、兵士等を會せしめて政務上の助言を求むる等、國人普く其盛德を頌し、カロロ大帝の尊號を奉る。



**4 フランクの分裂**　八一四年帝歿して、嗣子ルイス立つ。然れども暗弱にして其四子互に領土を爭ひ、結局は中部、西部、東部に分裂し、中部獨り帝號を稱したり。然るに其後中部帝國衰へて唯イタリアを領するのみとなりしかば、東西フランク王國殆んどカロロの遺圖を分領し、西フランク王國は今のフランス、東フランク王國は今のドイツの基を成せり。

## 七、ノルマン

**1 ノルマン**　北人の義にして北歐のゲルマニ族たり。今のスウエーデン、ノルウェー、デンマルクの地に住し大膽勇敢の民にして、土地多く不毛なると長子相續の習慣とは之を驅りて海寇たらしめ、常に小船に乘じて沿海各地を侵掠し、遂に一大運動を起すに至りしものなり。

**2 フランク侵入**　先づカロロの歿後フランク王國の紛爭に乘じて之を侵す。而して東部フランクは能く之を擊攘し終りたれども西部フランクは國内騷擾絶えざりしを以て、國王是が防禦に苦しみ、紀元九一一年ノルマンの酋長ロロをノルマンヂー公に封じ、以て和を講じ其鋭鋒を避けたり。

**3 イギリス侵入**　イギリスは紀元八二七年エグベルト王國内を一統せしが、既に其當時よりノルマン數々來寇して漸く土地を蠶食す。然るにエグベルトの孫アルフレド大王勇武にして海軍を創め、學問を奬勵して法律を編纂せしめ國家を累卵の危地より救ひたるも、時已に遲く、王國の版圖半は既にノルマンの手中にありき。下つて一〇一六年にはカヌート大王遂にイギリスを併呑し終り、遠くデンマルク、ノルウエー及びスウエーデンの一部を兼領して威を歐洲に振ひしも、後嗣に至りて勢力を失ひ、一〇四二年には國民舊主統たるエドワルドを立てゝ王とす。然るに其歿するや又ノルマンヂー公ウイルレム、ローマ法王の許可を得て一〇六六年イギリスに渡り、ヘースチングスの一戰に是を平定したり。ウイルレム一世即ち是なり。



**4 イタリア侵入**　ノルマン亦九世紀以來十一世頃まで盛んに地中海沿岸及び其島嶼を侵刼せしが、ノルマンヂーの武士ロベルトギスカルド南イタリアの小邦を征服し、勢ひに乘じて東帝國を犯し大勝を得たりしかば、其甥ロジエロ、シチリアよりサラセンを驅逐してナポリ王國を創建し、學問、實業を奬めて國勢頗る隆盛を致したり。

**5 ロシア侵入**　ノルマンの一派ルスは、スラブ人の内亂に乘じ

て東侵行動を開始し、九世紀末には其酋長イゴリ遂にスラブ族の大半を征服し、キエフを首府としてロシアの始めを成せり。ロシアとはルスより出でたるものなり。

## 八、神聖ローマ皇帝とローマ法王

**1** フランス王國の確立　西フランクはカロロ王の歿後歴代の君主暗弱にして國勢衰へしが、九世紀の末に至りパリ伯オド選ばれて王位に卽き、爾來百年間カロリンガ家と交代して王位に登り、九八七年カロリンガ家最後の王ルイ五世歿するに及び、オドの後裔フランス侯ユー、カペー王位に登り、都をパリに奠めてフランス王國を立て以て子孫相傳へ八百年の久しきに及びたるものなり

**2** ドイツ帝國の始　東フランク王オルヌルフ、ドイツ地方を統一して自らローマ皇帝兼ドイツ王と稱せしが、後嗣何れも暗弱なりしかば王權遂に衰へてカロロ大帝の王統茲に斷絶し、爾後選立王國となり、十世紀の初よりフランケン侯コンラデ、サクソニア侯ヘンリ、其子オットー一世相繼ぎて統治せり。



**3** ホンガリア國建設　アルヌルフ以來、ドイツ歴代の帝王はイタリアを伐ち、又ノルマン族及び突厥族のマジアール等を征し大に國威を張りたるが、マジアールは遂に今のホンガリアに據り以て漸く開明に趣き列國と相伍伴するに至りしものなり。

**4** 神聖ローマ皇帝　オットー一世ドイツ國王となるや、英邁にしてドイツ諸侯の叛亂を鎮定し、其地を擧げて近親に與へ大に王權を張り、遂にはイタリアを全く伐ち平げたり。是に於てローマ法王はオットーに帝冠を加へ、尙神聖ローマ皇帝の稱號を與ふるに至りしかば、是よりドイツ王は歴代イタリア王を兼ね、ローマ

帝の資格を有することゝなれり。時に九六二年。

然れども、歴代のドイツ王餘りに力をイタリアに用ひたる結果、本國の王權漸く弛み諸侯の權又增長して其統一頗る困難を極めしと雖も、之がためイタリアの文化を輸入し、以て今日の開明を致したるに効あり。

## 5 皇帝と法王の爭權

### イ、皇帝と法王の關係

斯くして皇帝は政治上大統一の爲めには正教の大首領にして諸族の尊信厚き法王を利用し、法王また久しく有力なる保護者なかりしかば、其宗教上大統一のため皇帝の武力を利用せんとしたり。然れども互ひに大統一の理想ありて両々相下らず、両者の爭權絶ゆることなく、遂に法王は武力の強き皇帝のため屢々廢立せらるゝことありき。



### ロ、グレゴリオ七世

紀元一〇七三年法王グレゴリオ七世立つ王は微賤より起りて豪邁なる氣慨を有す。常に世界一般博愛敬虔にして殺伐爭鬪の跡を絶たんとせば、宜しく自ら各國君主の上に位し、以て之を教導指示せざるべからずと思惟し、先づローマ本山教會の改革を企て、僧官の賣買、僧徒の妻帶を禁じ、寺領授與の權を皇帝より奪はんと謀りたり。

時にサクソニア王統絶え、フランケン家のヘンリ四世ドイツの王位にあり。幼きとき即位せしかば、諸侯之を機として跋扈す是に於てヘンリ長ずるに至り、悉く之を抑壓して帝權の伸張に汲々たりし折柄、法王の侵權に逢ひ、斷然之を肯せず、強硬に反對を主張す。法王因りて帝を破門し、其臣民に服從の義務なきを宣告せしかば、帝亦宗教會議を開きて法王を廢す。然るに

諸侯は何れも帝の壓抑を惡み、法王に黨して却て帝の廢立を謀りしかば、一〇七七年帝自ら法王をカノサ城に訪ひ、跣足雪中に立ちて哀訴歎願すること三日、僅かに破門を免せらる。既にしてドイツ人民漸く之に激し勤王心盛んに起りしかば、帝自ら兵を率ゐてローマに入り、遂にグレゴリオを廢して新に法王を立て、グレゴリオは志を遂ぐる能はずしてサレルノに憤死せり時に一〇八五年。

八、フレデリキ　其後も皇帝と法王との爭ひは益々劇しく加之ドイツ帝位は常に爭奪止まざりしかば、法王は盛んに之を利用して之に干渉したれば、黨派の爭鬪しばしも止むことなかりき彼の十二世後半に亘りて名君と稱せられしフレデリキも流石に之を如何ともする能はず、其子ヘンリ六世はナポリを併せてイ



タリアを統一せしと雖も、ドイツの黨爭は益々甚しく、加ふるに法王インケントはグレゴリオ七世の志を成就せしめて、各國君主を威壓せしめし勢ひを籍り、特に熱心干渉を加へしかば、ドイツは常に二王を見るの奇觀を呈したり。

二、皇帝と法王の末路　爾後紛擾益々甚しく、一二五六年より一二七三年に至る期間は帝室斷絶して諸侯互ひに相攻め以て國力を疲弊せしめ、法王の權力亦衰替するに至りぬ。

九、サラセンの末路

1　西サラセンの衰弱　サラセン國は東西に分れて尙隆盛を極めしが、其後等しく内訌に苦しみ、小邦群起して統一すべからず其の西サラセンにてはイスパニア半島の西北部に餘喘を保てる西ゴート人再び起りて漸次其領土を蠶食し、數多の基督教國を起し

たり。

**2** 東サラセンの末路　東サラセンに在つては、十一世紀の初めセルジウク、トルコ人ペルシア北部に起り、西アジア一面を併呑して都をイスパハンに置き、バグダードなるハリファをして僅かに其敎權を維持せしむるまでに至らせしが、同世紀末に及びては全く數多の小國に分裂せり。

## 一〇、十字軍

**1** 原因　是より先キリスト敎徒はイエルサレムなるキリストの墳墓に詣づるを以て無上の功德となしたりしが、サラセン人また是等巡拜者の爲めに利を得るを德とし意を盡して好遇せしに、セルジウク、トルコ人は之に反して是等巡拜者を見ること蛇蝎の如く、其聖地を占領して巡禮者を虐遇すること甚し。時にフランス



の僧ペテロ親しく其慘狀を目擊して憤慨の餘、歸來盛んに各國に遊說し、以て熱心聖地の恢復を唱導し、人心を激動すること大なりしに、折柄ギリシア皇帝亦セルジウク、トルコ人の猖獗に苦しみ、遙かに書を寄せて援を法王に請ふ。時に法王ウルバノ二世は法王權擴張の大野心を抱き、之を成就せしむるの機會茲にありとなし、大に十字軍を勸誘し、一〇九五年には諸國の僧俗貴賤をフランスのクレルモンに會し、親臨して聖地恢復のことを謀りしかば、衆感激して之を贊し、翌年を以て上征の期と定め、赤色の布を十字形に裁ちて肩章とすることになしたり。

**2** 遠征

**イ、先驅**　然るに信仰の熱情に驅られたる狂奔烏合の徒約二十萬は、出征の期を待たずして出發し、以て遠征の先驅を爲せし

も、小アジアに至りて大敗し、全軍殆んど鏖殺せられたり。

**ロ、第一十字軍**　翌年期に從つて第一十字軍約六十万、ロートリンゲン伯ゴドフレドを主將として東征し、苦戰の後遂にイエルサレムを拔き、主將を王としてイエルサレム王國を建て、以て志を達し得たり。時に一〇九九年。

**ハ、第二十字軍**　然るに其後トルコの勢力を恢復するや、イエルサレム王國危し。是に於てドイツ王コンラデ三世、フランス王ルイス七世と共に第二十字軍を起し、之が救援に赴きしも、コンラデは病死し、ルイスは利あらずして軍を還しぬ。時に一一四九年。

**ニ、第三十字軍**　ついでサラセン人埃及に起りてチグリス河以西の地を畧したるより、イエルサレム王國遂に亡びぬ。時に一



一八七年、是に於てドイツのフレデリキ一世帝、フランス王フイリポ二世、イギリス王リチアード一世等第三十字軍を起したるも、是又効なし。

**ホ、第四十字軍**　一二〇二年法王インノケント三世の命に依りフランス、ドイツ、イタリア諸侯の出征せしものなりしも、目的地には達せずして却て途中東ローマ帝國の内亂に乘じ、其首都コンスタンチノブルを陷れてロマニア帝國を建つ。

**ヘ、第五十字軍**　紀元一二二八年ドイツ帝フレデリキ二世の出征にして、一時はイエルサレムを恢復せしと雖も、間もなくホラズム人に亦滅ぼされたり。

**ト、第六十字軍**　一二四八年フランス王ルイ九世の出征なるも戰敗れて埃及に擒はれ、後生還して再舉を圖りしも全く効なし

**チ、第七十字軍**　一二七〇年ルイ九世再擧を圖りしものにて、海路チユニスに至り病を得て陣中に歿し、茲に全く最後の無効を告げ、アジアに於けるキリスト敎國は終に其根據を失ひたり

**3 結果**　十字軍は紀元一〇九六年より一二九一年に亘る約二百年間、爲めに歐洲諸國が犧牲に供したる生命財産は擧げて數ふべからず。而も聖地恢復の目的は遂に達せず、唯一場の夢と化し去りしが、また之に依りて受けたる利益も頗る顯著なるものあり。現今歐州諸國が世界に覇を稱するに至りしも、全く此結果に外ならざるべし。其要項を左に列擧せん。

**イ、**回敎國の文化を輸入し見聞大に廣まりたり。

**ロ、**航海通商の術大に進歩せり。

**ハ、**小貴族が軍費の爲めに破産し、延いて大に其勢力を失墜し、



封建の廢絶を早め、都府發達の端緒を開きたり。

**ニ、**法權の擴張と、寺院の財政を豐かならしめたり。

**ホ、**騎士制度の確定を促し、社界風習上に大影響を及ぼせり。

## 二、西歐の制度と情形

**1 封建制度**　ゲルマニ族の一度西歐に雜居するや、ローマの屯田制に倣ひ、到る處土民より一定の地を取り、公民皆兵にして事ある時は兵役に從ひしが、其後豪族が是等の墾田を占め、寺院は寄附田を領して、地頭領主の形漸く、茲に封建の兆を成せり。カロロ大帝の死後、國亂れて侯伯各其地に據り、多數の從臣を扶持して自ら强くし、大寺高僧も其寺領に據り從臣を集めて自ら衛るに至り、是等の貴族亦名義上は一應其領地を帝王に獻じ、更に帝王より封ぜられて、君臣の義是に成り、隨つて陪臣の關係を生

じたるものなり。後ち、十一世紀よりは此制度一般に行はれ、諸侯各其領地に堅固なる城を築き、以て譜代の臣を養ひ所謂封建の制度成りしものなり。

**2 武門武士**　封建制の兆すや、フランク國隆盛に趣くと雖も、小民は連年の戰爭にて生活困難に陷り、地方の豪族を賴みて後臣となり、其土地を借りて生計を營み、戰時には主人に從ひて出陣し、以て平生の恩を報ず。豪族亦領内の强壯なる者を選拔し、之を保護監督して從臣となす。斯くして父子相傳へて譜代主從の關係を生せり。武門武士是に初まる。

**3 騎士**　武門興りて武士道生じ、封建に伴ひて騎士といふ者起れり。騎士は敬神忠君を精神となし、勇敢任俠を美德とせる一種の武士をいふ。元來騎士は貴族專横を極めて細民を苦しめ、婦女



を侮辱するを憐み、任俠の士、馬に騎りて天下を遍歷し、細民婦女の難に赴きしに始まりしかば、特に婦人を尊敬保護するを以て其任と爲せり。

而して騎士とならんと欲する者は、幼きより王侯貴婦人に扈從し禮節を學び、長じて騎士の從士となり武藝を練り武士道を研き、然る後嚴重儀式の下に騎士となるものなり。然れども、漸次優美輕操の風を成し、根本の義俠を失ふに至れるは惜むべし。

## 三、東歐の國情

**1 ロシア**　ロシアは十世紀の末にイゴリの孫ブラヂミル立ち、屢々ギリシア帝國(即ち東ローマ)を侵し、タンチヌス八世之に妹を嫁せしめて纔かに和を結び、以てキリスト教に入らしめたり。

後、ブラヂミルの歿後内亂起りしが、其子ヤロスラーブ出て亂を平げ國威を揚げ、大に商業、文學を奬勵し、多くの寺院を建てゝ聖書を國語に飜譯せしめ、ギリシア文化を輸入したる功績尠からざりき。

**2 ギリシア帝國**　ギリシア帝國は曩日の國運亦見るべからず、國威は日に衰へ、外寇は日に繁かりき。此時に方り、歐洲各國の十字軍は屢々國内を通過せしが、遂に第四回十字軍遠征に際し、帝國の内亂激甚なりしかば、本來の趣旨に背き帝國に留つて大に干渉を試み國都を破りてアレクシオス帝を擁立したり。然るに帝は軍に向て報酬の約を履まざりければ、軍は遂に再び帝を廢立しラテン帝國を建設し、封建制を布きたり。故を以て其政統一せず却て舊帝國の遺民に乘ぜられてギリシア帝國再興したれども、是



亦内亂相次ぎ、國勢復た舊の如くならず。

## 一三、蒙古の侵入

**1 モンゴル族の强勢**　一一五四年東ヨーロッパに接續せしモンゴルにテムチン生れたりしが降て一二〇六年に至り成吉思汗と稱し、大に附近を侵略してホラズムを征し、次でチエベ、スブタイの両將をしてロシアの東南部たるキプチャク國を討たしむ。時にロシアは國内分裂して爭鬪を事とせしかば、モンゴルの入寇に會ふや、諸侯遽かに同盟して防戰せしも既に敵はず、遂に其平げらるゝ所となりぬ。

**2 バッの西征**　成吉思汗歿して其子太宗之を繼ぐや、再び西征の大師を起し、其姪バッを大將となす。バッ乃ち五十餘萬の大軍を帥ひ、一擧にしてブリガリアを滅ぼし、ロシアに入りてキエフ

を陷れ、漸次進んでヨーロッパ諸國に侵寇したりしかば、爲めに全歐震駭し、法王は各國に檄して十字軍を組織せしめむとせしに會々太宗の訃音至り、バッ直ちに師を還したりしかば、他の諸國は侵略を免るゝことを得たり。而してバッは遂に國に還らずして其征服地にキプチヤク國を建設し子孫世々之に王たり。

**3** チヤガタイ國　而して成吉思汗の第二子、チヤガタイは中央亞細亞地方のトルキスタン、アフガニスタン等を征服してチヤガタイ國を建てたり。

**4** イルハン國　又成吉思汗の第四子ツルイの子フラグはペルシアを征し、一二五八年には遂にサラセン國の都バクダードを陷れアッバス朝を倒し茲處にイルハン國を建立したり。

## 一四、イギリスとフランス

**1** イギリスの憲法發達

**イ、ノルマン王朝**　一〇六六年ノルマンヂー公ウイルレム一世イギリスに渡りてハロルド伯を破り、以て王位に即くや、其大部を王領とし殘部にノルマンの貴族を分封し大にフランス語及び其習慣を輸入したり。一一五四年ヘンリ二世立つや、父祖の遺産と王后の相續とにより、フランスに於ける其領土は同國の王領を凌駕し、王は諸侯を威壓して王權を伸張し、其子リチアード一世に傳へたり。

**ロ、大憲章の制定**　リチアード一世の次はジオアン王なり。ジオアン王はヘンリ二世の子にして兇暴暗愚なりしが、兄リチヤード王の歿後王位に即き、疾く民心を失ひ國内動搖せるの際、フランス王フイリポの乘ずる所となり、フランスに於ける其領

地の大半を失へるのみならず、法王インノケント三世と爭ひて破門せられ、其結果は國土を法王に献じ以て其臣と稱し大に國威を損ぜるのみならず、數々重稅を課して國民を苦しめしかば諸侯及び僧侶等國民と共に王に迫り、一二一五年遂に大憲章を欽定せしめたり。大憲章とは卽ち國王の權限を定め民權を重んじ課稅協贊權及び王權濫用に對する抗爭權等を規定したるものにして、イギリス立慶制度の端緒となれり。

**八、下院の濫觴**　ジオアン歿して其子ヘンリ三世立ちしが、是亦無道にして暴政多く、折角制定したりし大憲章を破らんとせしかば、シモン、ド、モントフォール等之に抗し、一二五六年には王に迫り以て大憲章の條文に基き、貴族僧侶及び都市の代表者を召集し以て議會を開かしむ。是下院の濫觴なり。



**二、憲政の固定**　斯の如く暴君出でゝ人民其壓迫に堪へず、立憲政體の端緒を開きしが。其後エドワルド一世、同二世の代を經て同三世に至り、百年戰爭を惹起すると共に、イギリスの立憲政體は茲に全く固定して、また動かすべからず、以て今日に至れり。

**2　フランス王權の確定**　九八七年フランスのカロリンガ王統絶ゆると共に、パリ伯フーゴー、カペー王位に即き以てカペー王朝を創め、子孫相襲て第七世フイリポ二世に至りしが、英邁にして大志あり、頻りに四隣を征服し市府に特權を與へて諸侯を抑へ、次でイギリスと戰ひて其領地の過半を沒收し王權初めて强大となれり。後ち其孫ルイ九世に至りては智德兼備の明君なりしかば益々民權を保護すると共に諸侯を抑え、學術技藝を奬勵し大に王

權の擴張を圖り、其孫フイリポ四世亦大に父祖の遺志を繼ぎて之が振張に努めしかば、茲に初めて平民議會を召集し法王ボニファキオ八世を廢してクレメンス五世を立つる等、法王權を左右するまでに至りしものなり。

## 一五、百年戰役

### 1 衝突の原因　一三二八年、

フランス王フイリポ四世の男系絶ゆると共に、其甥たるフイリポ六世王位に登れり。時にイギリス王エドワルド三世はアイルランド、ウエールス、スコットランドを併せて勢威頗る盛んなりしかば、其母がフイリポ四世の女なるを口實とし己れ繼承の權ありとなし以てフランス王位を覬覦す。然れども、フランス國民は他國の王を戴くを欲せず遂に兩國間百年戰役の端を開けり。（卽ち一三三九年より一四五三年に至る）



### 2 其の前半　一三四〇年

遂にイギリスの艦隊先づ出動してスロイス沖にフランス艦隊を破り、次でイギリスの皇太子にして黑太子と稱せられたるエドワルドは陸軍を率ゐてフランスに攻め入り連戰連勝を以てフランス軍を破り、フランス王ジオアンを擒となして其西半地を割讓せしめ以て和議を結びたり。

其後イギリスに騷亂あり、國威少しく衰へたりしかばフランス王カロロ五世は其機に乘じて兵を擧げ、舊領地を復したりしも、其子カロロ六世は尙幼弱にして貴族跋扈し國威振はず、爲めに又復イギリス王ヘンリ五世フランス軍を破り、再び領土の大半を恢復し、尙カロロの死後はフランス王位を繼承すべき約を結びたり。

### 3 其の後半

時にフランス王カロロ七世は猶太子として僅にオルレアン城を保ちたりしが、尙專心恢復の策を講ぜしに、偶々オ

ルレアンの少女にジアンヌ、ダルクと稱するもの出で、義兵を擧げて遂にイギリス軍の圍を解かしめしかば、フランス軍は爲めに士氣大に振ひイギリス軍全く國外に驅逐せられて百年戰役茲に局を結びたり。

**4** 媾和　一四五三年には兩國の委員アルラス（フランスの一小地）に會して媾和條約を結び、イギリスは全くフランスに於ける領地を失ふことゝなりぬ。

## 一六、ドイツ帝權の失墜

**1** ハプスブルグ家の興起　一二〇五年ドイツにてはフレデリキ二世歿してスタウフエン家の系統絶え爾來君主なきこと殆んど二十餘年、所謂大空位時代を現出して紛擾を重ねしが、一二七三年に至りハプスブルグ侯ルドルフ選ばれて帝位に即き、精勵以て國



政を執り國内初めて安んずることを得、其子アルベルトにオーストリア侯國を與へ以てオーストリア家の基を開きたり。次でレクセンブルグ家の諸帝位を繼ぐこと約百年なりしが、一四三七年シギスムンド帝歿してオーストリア公アルベルト帝位に即くに及び、子孫相次で位にあること二百七十年、此處にハプスブルグ家の勃興を見るに至れり。

**2** 黄金文書　一三四七年カロロ四世選ばれて帝位に即くや、頗る統御の才に富み、シレジア、ブランデルブルグを取り一意帝國の强盛を計りしも、ドイツ諸侯の勢力牢として拔くべからず、一三五六年遂に已むなく黄金文書を發布し、從來七大諸侯の皇帝選擧權を公認せり。爲めに皇帝の權力全く失墜するに至りしものな

**3** スウイス國の獨立　此時に乘じ、北部イタリアの諸都市また各獨立して自治制を布き、次でスウイスも皇帝直領よりハプスブルグ家の領有に歸せしかば、シユワイツ、ウリ、ウンテルワルデンの三洲遂に同盟して反旗を擧げ、一三八六年には全くオーストリア軍をセムバハに破り、茲にスウイス獨立の基礎を固めたるものなり。

## 一七、ローマ法王權の失墜

**1** 衰微の原因　十字軍時代に於ては最高權を有したりし法王もドイツ帝權失墜に加ふるに代々の法王漸く敗德非行の振舞多く、のみならず其餘りに政治其他一般の俗事に干涉を試みること甚だしかりしかば次第に一般の信仰を失ひ、遂に法王權失墜の基を爲せり。



**2** 法王とフランス王　一二八五年フイリポ四世フランス王位に登るや、僧侶の免稅を責めて一二九六年には國內敎會領に課稅するに至れり。茲に於て法王ボニフアチオ八世は極力是に反對し王を破門したりしかば、王は却て議會の協贊を受けて之と對抗し、一三〇三年には法王を憤死せしむるに至れり。

**3** バビロニアの幽囚　是に於てフランス王はクレメン五世を法王となして領內アビニオンに居らしめ、爾後七十年間八代の法王はフランス王の命維れ從ふに至りしが、之をバビロニアの幽囚と稱す。後グレゴリオ十一世法王に至り、ローマに歸りしかば、フランス人はウルバメ六世を擁立して法王と爲しゝかば、一時に二法王存在の奇觀を呈したり。其後四十年間は佛、西二國はアビニオン法王に、伊、獨、英三國はローマ法王に屬し互ひに正閏を論

難するに及び教會の威信全く失墜したり。

**4** 宗教改革の聲　斯の如く教會の腐敗甚だしきに從ひ、個人として漸く宗教改革を主唱せしむるに至れり。即ち英人　イクリフ先づ其先驅として寺院の腐敗、法王の俗事干渉を攻擊せしかば、各地また之に應じ、ボヘミア人たるフス、ジエローム等大に改革を叫び、遂に異端者と認められ宗教會議に依り焚殺せらるゝに至りしも、改革の聲は遂に抑止する能はず、後年の大改革を現出せしめぬ。

## 一八、西歐諸國の中央集權

**1** イギリスの中央集權

**イ、薔薇戰爭**　百年戰役終を告ぐるや、ヨーク公リチアード王位を覬覦したるより、三十年間の久しき國内両黨に分れて戰爭



止まず、一旦はヨーク家勝ちて王位を占めしと雖、一四八五年ランカスター家の一支族チウードル家のヘンリ七世遂にヨーク黨に勝ちて國内を一統したり。即ちランカスター黨は紅薔薇を、ヨーク黨は白薔薇を用ゐて其表章としたりしかば、之を世に薔薇戰爭といふ。

**ロ、ヘンリ七世**　ヘンリ七世王位に即きてチウール王朝を始めしより、鋭意諸政を改革して星室廳を設け、以て貴族の權を削ぎ、民有地を王領に收むる等大に商業をすゝめ、專心王權の伸張を圖りたり。

**2** フランスの中央集權　百年戰役後カロロ七世は稅法を改め財政を整へ常備軍を新設して大に版圖の擴張に力め、其子ルイ十一世また王權を伸張して漸次大諸侯の領土を沒收し、其子カロロ八

世の代にはブリタニア公の地を併せ、屢々法王、ドイツ皇帝等と爭ひて國威を揚げ、王室の確立を計りたり。

**3 イスパニア建國**　イスパニアはもとサラセン人の征服する所となりしが、其後勢力を失ふに至りてより、ナバラ、カスチリア、アラゴン、レオン等のキリスト教王國相踵で起り、一四六九年にはアラゴン王フエルヂナンド、カスチリアの女王イサベラと婚するに至り遂に両國相合してイスパニア王國の基を開き、一四九二年にはサラセン最後の根據地たるグラナダを陷れ以てイスパニア統一の大業を完ふし、法典を編纂して貴族の專權を抑へ大に王權を擴張したり。

**4 ポルトガルの建國**　もとイスパニアのカスチリア國の屬邦なりしが一一四〇年遂に獨立して王國となり、リスボンに都してジ



オアン二世に及ぶや王權漸く振ふに至れり。

## 一九、オスマンリ、トルコの勃興

**1 オスマンリ、トルコの隆盛**　オスマンリ、トルコはもと裏海東方の蠻族なりしが、一時蒙古人の强盛なりしと同時に其壓迫を避け、一二二五年頃にはアルメニア地方に移り更に小アジアに轉じセルジュック、トルコに隷屬したりしも、オスマン部長となり自立して皇帝となるや、其子ウルカンは東帝國の小アジア領を併呑し、キリスト教徒の青年を訓練し國權を固め、孫ムラッド一世に至りては遂にヨーロッパに侵入し、東ローマ帝國の大部分を蠶食し、アドリアノプルに奠都せり。

然るに其子バヂアシッドまた英邁なりしかば、進んでボスニア、ギリシア等を侵略するに至り、歐洲各國は震駭して十字軍を組織

したりしも却てニコポリの戰爭に敗軍し、都コンスタンチノブルを包圍されしかば、ギリシア皇帝は急をチムルに告げ其救を求むるに及べり。

**2** チムル帝國　蒙古帝國は一旦瓦解せしも、間もなくチムル出で、再びアジアに大帝國を建設し、ギリシア皇帝の請ひを容れて大舉小アジアを攻め、遂にトルコを破りバジアシットを生擒したりしも、後ち其病歿するに至り後繼者暗弱なりしかば此大帝國も又々分裂するの已むなきに至りたり。

**3** 東ローマ帝國の滅亡　斯くてトルコ人の勢ひ又も旺盛となりムラッド二世出で、大に威力を挽回し、其子ムハメド二世の即位するや、直ちにコンスタンチノブルを包圍して遂に之を陷れ東ローマ帝國茲に滅亡したり。時に一五四三年。是に於てトルコは都を此處に移し、現今のトルコ帝國を建設するに至れり。

## 第三章　發見と復興

### 二〇、文運復興

**1** 暗黑時代　中古史の初めに於ては蠻民遷徙に引續ける西歐混亂の時代なりしかば、上古に於けるギリシア、ローマの文明も暫らく光を收め、學問は僅に僧侶の手に維持せられたるものなり。故に、西歐人の精神も全く宗教家に支配さるゝところとなり、人人は迷信の淵に沈み、封建制度の爲め人心全く萎縮したれば、文學美術また觀るに足るものなく、中古期の初め五百餘年間は全く暗黑時代と稱するの至當なるものなりき。

**2** 文藝復興　然るに十字軍の一度起るや、爲めに見聞知識を廣むること大方ならず、宗教熱の冷却と共に封建制度破壞せられ大

に身心の自由を得しかば、世は漸く文藝復興の機運を促し、其先づ興りしものを人道派となす。即ち其根源は全く宗教に關係なかりしかば、之が束縛を受くることなく自由活潑の精神に依て眞理を研究したるものなり。而して彼の有名なるダンテを初めとし多くの學者輩出して古書を求め古文を研究せしも此時なり。是と同時にギリシアの學者亂を避けてイタリアに移住する者多かりしかば、研究上一層の進歩と利便を得て、イタリアは文學の中心地となれり。

**3 美術の復興**　文藝の復興に伴ひてギリシア、ローマの美術を研究することも亦大に流行し、ミケランジエロの繪畫、彫刻、建築、ラフーエロの繪畫の如き實に稀世の名手を出すに至りぬ。

## 三、諸種の發明と發見



**1 活版の發明**　知識の發達と共に之が普及擴張に利便を與へたるは活版の發明なり。從來書籍は大抵謄寫によりて傳はり其不便と高價甚しかりしが、十五世紀の初ドイツ人グーテンベルヒ初めて活版術を創始したり。

**2 地理上智識の發達**　中古に於ける西歐人は地理上の智識極めて淺薄なりしが、十字軍以後交通漸く頻繁となりしより旅行冒險家多くなりたり。就中イタリア人マルコ、ポーロは元の世祖に仕ふること二十年、其歸國するや東方見聞記を著して盛んに支那及び日本の富盛を稱し大に西歐人の遠征心を奮起せしめぬ。然れども尚東洋の通路開かれず、一般に海上航路の發見を熱望したるものなり。

**3 地理上の發見**

イ、喜望峯の發見　一四八六年ポルトガル人バルトロメ、ヂアス初めて喜望峯を發見し、次で同九七年には同國人たるバスコダカマ之を實地に迂回して印度に達するに至り、多年熱望せる東洋航路茲に開けぬ。

ロ、アメリカ發見　時にコロンブスなる者は地球圓形説によりイスパニア王后イサベラの助けを受け、一四九二年斷然意を決して西方に直航し彼のアメリカ大陸を發見したり。

## 三、兵制の變革

1 火藥の發明　年代は詳かならざれど、サラセン人に依りて火藥、火器の傳はりしより、戰法頓に一變したり。

2 戰法變遷　中古に於ける一般の戰爭は單に騎士の突貫を以て重大戰鬪力なりと認められしが、一度火藥の應用せらるゝに至り



城壁甲冑は爲めに効力を減じ、茲に戰法軍制の一大變革を生ぜしめたり。故に是より封建制度と騎士制度の廢滅を促がし貴族なる者の勢力頓に減少したるものなり。

最新西洋歷史　前編　終

普通學研究會著

研究の好伴侶
繙讀閲覧至便

# 受驗準備叢書

寸珍形
正價各冊金拾貳錢
郵稅各冊金四錢

中學校、師範學校、高等女學校其他一般中等程度諸學校に在學せらるゝ學生諸君、日常研學の復究の好師友として、將た好伴侶として、且つは進んで高等諸學校に入學せんとし、將た各種競爭試驗に應せんとする諸君が受驗準備用寶典として、茲に學生研究叢書の刊行成る。而して各書は編纂の統一と各科連絡を保たんが爲め其叙述は擧げて之を普通學研究會に委托せり。同會が多年の經驗と苦心の操練は世の夙に知る處、故に其内容や要を摘みて煩を避け、冗を省きて精を蒐め、一覽の下に研究準備の良顧に問ふを得ること爰に贅言の限りにあらず請ふ瓦礫と同視すること勿れ。

▼既刊書目▲

- ◉最新 日本歴史 全一冊
- ◉最新 西洋歴史 全二冊

▽近刊書目▲

- ◉最新 外國地理 全二冊
- ◉最新 日本文典 全一冊
- ◉最新 化學 全二冊
- ◉最新 動物學 全一冊
- ◉最新 鑛物學 全一冊
- ◉最新 算術 全一冊
- ◉最新 幾何學 全二冊
- ◉最新 東洋歴史 全一冊
- ◉最新 日本地理 全一冊
- ◉最新 英文典 全一冊
- ◉最新 物理學 全二冊
- ◉最新 地文學 全一冊
- ◉最新 植物學 全一冊
- ◉最新 生理及衛生 全一冊
- ◉最新 代數學 全二冊
- ◉最新 三角法 全一冊

明治四十三年三月十五日印刷
明治四十三年三月二十日發行

普通學研究會著

正價拾五錢

大阪市南區安堂寺橋通四丁目一〇九番邸
發行者　井上尙一

東京市麴町區飯田町貳丁目四〇一番地
發行者　井上鐵次郎

大阪市西區本田町通一丁目四七ノ二
印刷者　日出民助

不許複製

發行所

東京市麴町區飯田町貳丁目
井上書堂
振替口座　東京一九八〇九

大阪市南區安堂寺町四
振替貯金口座　大阪三四九四